

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
被服材料学演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	被服に用いられる繊維の物性と構造の関係について総合的に学修する。特に、高強度繊維の構造と物性の関係について学修することを通じて、紡糸過程での高分子の配向制御と構造形成について理解する。また、高分子の結晶化について、その物理理論の基礎を学修する。	1. 繊維の構造について、高分子の特殊性を理解した上で説明することができる。(知識・理解) 2. 繊維の紡糸過程での構造形成について、高分子の特徴を理解した上で説明することができる。(知識・理解) 3. 高分子の結晶化について、理論的に説明することができる。(知識・理解)	1. 繊維の構造について、基本的なことを説明することができる。(知識・理解) 2. 繊維の紡糸過程での構造形成について、基本的なことを説明することができる。(知識・理解) 3. 高分子の結晶化について、現象論的に説明することができる。(知識・理解)
被服管理学特論	家政学研究科 被服学専攻	1	2	繊維製品の素材、染料、媒染剤、加工剤とその分析法、繊維製品の劣化の要因とその影響、繊維製品の洗浄、保存、管理について、論文講読により学ぶ。さらに、洗濯や染色に関する課題を見つけ、実験的に検証する手法を学ぶ。	1. 論文講読を通して、繊維製品の洗濯、保存、管理に関する専門知識を正確に説明できる。(知識・理解) 2. 理解した内容をプレゼンテーションソフトを用いてわかりやすく説明することができる。(技能) 3. 洗濯や染色に関する課題を見つけ、実験計画をたて、実際に実験を行うことができる。(技能) 4. 実験結果を深く考え、考察した後、文献を利用して論文形式の研究レポートを書くことができる。(思考・判断・表現) 5. 論文講読や研究レポートの作成を通して、さらなる課題を見出すことができる。(関心・意欲・態度)	1. 論文講読を通して、繊維製品の洗濯、保存、管理に関する専門知識を理解できる。(知識・理解) 2. 理解した内容をプレゼンテーションソフトを用いて説明することができる。(技能) 3. 洗濯や染色に関する課題を見つけ、実験計画をたて、実際に実験を行うことができる。(技能) 4. 実験結果をまとめて、レポートを書くことができる。(思考・判断・表現)
被服環境学演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	人間を取りまくさまざまな環境に対応するための衣服の問題について文献等を利用して理解を深める。機能的で快適、かつ健康な衣生活を実現するために、環境と人間特性との関係に軸足を置いた衣服研究の方法を学修する。	1. 被服が有する諸機能のうち被服と環境のかかわりを自然科学または社会科学のな見地から理解できる。(知識・理解) 2. 被服環境学に関わる文献内容を正確に理解できる。(知識・理解) 3. 被服環境学に関わる文献内容を正確に理解し、説明することができる。(思考・判断・表現)	1. 被服が有する諸機能のうち被服と環境のかかわりを自然科学または社会科学のな見地から理解できる。(知識・理解) 2. 被服環境学に関わる文献内容を理解できる。(知識・理解) 3. 被服環境学に関わる文献内容を理解し、説明することができる。(思考・判断・表現)
アパレル行動論演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	マーケティング戦略の基本を踏まえながら、消費者意識および行動の変化と、それに対応するアパレルを中心とした企業のマーケティング戦略を、ケーススタディを交え講義する。また、演習の時間を設け、理論に基づいて実際にマーケティングプランを作成することにより、基本的応用力を身につける。	修士の学生として、講義と演習を通じ、アパレル企業戦略・マーケティング戦略に関する総合的な理解力の養成を図り、基本的な応用力を身につける。具体的到達目標として、以下の2点を挙げる。 1. アパレル関連企業のマーケティング戦略について、資料を通して理解ができ、問題点を指摘できるようになる。(思考・判断・表現) 2. 与えられた課題に対し、基本的なマーケティングプランを作成することができるようになる。(技能)	修士の学生として、講義と演習を通じ、アパレル企業戦略・マーケティング戦略に関する総合的な理解力の養成を図り、基本的な応用力を身につける。具体的到達目標として、以下の2点を挙げる。 1. アパレル関連企業のマーケティング戦略について、資料を通して理解ができるようになる。(思考・判断・表現) 2. 与えられた課題に対し、初歩のマーケティングプランを作成することができるようになる。(技能)
被服造形学特論	家政学研究科 被服学専攻	1	2	着衣基体としての人体と被服のかかわりを静態的・動態的に捉え、体型に適した着心地の良い衣服設計を追及するための諸要因や評価法について理解し、着用者の満足度のいく被服造形のあり方を考察する。	1. 人体と被服のかかわりを静態的・動態的に捉え、研究者の視点から諸要因や評価法について理解できる。 2. 着心地の良い衣服設計における諸問題を認識し、解決に導くための研究方法等を考察することができる。	1. 人体と被服のかかわりを静態的・動態的に捉え、諸要因や評価法について理解できる。 2. 着心地の良い衣服設計における諸問題を認識することができる。
被服平面造形学特論	家政学研究科 被服学専攻	1	2	日本の伝統的の衣服の形状および構造を、文献資料、絵画資料、実物資料、修復および復元報告事例を通して体系的に理解する。その知識を基に時代ごとの衣服の特徴を総合的に考察できるようになる。	1. 日本の伝統的の衣服における形状、構造、寸法、縫製、裁断に関する知識を関連付けて染織文化財を理解することができる。(知識・理解) 2. 染織文化財の作品の時代的特徴を予測することができる。(思考・判断・表現)	1. 日本の伝統的の衣服における形状、構造、寸法、縫製、裁断に関する知識を理解することができる。(知識・理解) 2. 染織文化財の作品の時代的特徴を理解することができる。(思考・判断・表現)
被服意匠学演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	被服に関する文献・資料を通して知識を広め、被服意匠学の方法を学習する。	1. 被服意匠学に対する専門的知識、研究能力を養い、商品企画の考え方、デザインを発想する方法論が理解でき、説明できる。(知識・理解) 2. デザイン分野における産業界の実務内容や提案方法に基づき、時代を捉えた企画の発想、提案、構成ができるようになる。(思考・判断・表現)	1. 被服意匠学に対する専門的知識、研究能力を養い、商品企画の考え方、デザインを発想する方法論が理解できる。(知識・理解) 2. デザイン分野における産業界の実務内容や提案方法に基づき、企画の発想、提案、構成ができるようになる。(思考・判断・表現)

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
染織文化史演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	日本人の衣生活のなかで様々な染織技法や繊維素材、色材などが用いられ、これらがさらに意匠と組み合わせられて一つの染織品が出来上がっている。これを理解するには実際の作品を実見することが必須となる。本科目では、日本の各時代の染織・服飾の実作品を目の前にしながら、その技法や意匠の内容を理解するとともに、これらが生み出された歴史的・文化的背景を考察する。	1. 染織・服飾の実作品に使用されている技法の時代的特徴や、技法の違いによる意匠表現の違いなどを理解する。(知識・理解) 2. 日本の染織・服飾の具体的な様相を観察した結果を、論理的に言葉で表現できるようになる。(思考・判断・表現)(技能)	1. 実作品を前に、各時代の染織品の素材・技法・意匠に関する特徴について理解する。(知識・理解) 2. その特徴が、どのような理由によってその時代に現れたのかを理解する。(知識・理解)
被服心理学演習	家政学研究科 被服学専攻	1	2	被服行動とその背後にある心理について理解するための、理論的かつ実践的な学びを行う。まず、心理学の歴史と定義について理解する。次に、心理学の基本的知識について確認したうえで、心理学分野の研究(量的研究・質的研究)の方法について把握する。体験的理解を深めるため、心理検査も行う。さらに、質的研究の方法について実践的に学ぶために、質問紙の作成・調査・KJ法による結果の分析を行い、考察を加えてレポートを作成する。	1. 被服行動とその背後にある心理について積極的な関心に向け、意欲的かつ計画的に学ぶことができる。(関心・意欲・態度) 2. 心理学の歴史と定義について体系的に理解することができる。(知識・理解) 3. 心理学の基本的知識について適切に理解することができる。(知識・理解) 4. 心理学分野の研究手法のうち、量的方法について総合的に把握することができる。(知識・理解) 5. 心理学分野の研究手法のうち、質的方法について包括的に理解することができる。(知識・理解) 6. 研究目的にしたがって質問紙を作成して調査を行い、KJ法による詳細な分類を行うことができる。(技能) 7. 調査結果について深い考察を行い、順序立ててレポートを作成することができる。(思考・判断・表現)	1. 被服行動とその背後にある心理について関心に向け、計画的に学ぶことができる。(関心・意欲・態度) 2. 心理学の基本的な歴史と定義について理解することができる。(知識・理解) 3. 心理学の基本的知識について大まかに理解することができる。(知識・理解) 4. 心理学分野の研究手法のうち、量的方法の基本について把握することができる。(知識・理解) 5. 心理学分野の研究手法のうち、質的方法の基本について理解することができる。(知識・理解) 6. 自分なりに質問紙を作成して調査を行い、KJ法による分類を行うことができる。(技能) 7. 調査結果を整理して、レポートを作成することができる。(思考・判断・表現)
被服コンピュータ応用特論	家政学研究科 被服学専攻	1	2	ファッションプロダクトの企画、設計から、製造、流通、販売、消費に至る様々な過程で情報技術が利用され、技術革新により従来のファッション産業が大きく変貌している。この科目では、まず、フィールドワーク等によりファッション産業における課題を抽出して検討する。次に、グループワークでデルファイ法やテクノロジーマッピングを実施し、生産者から消費者まで含めた今後のファッション産業について検討し、最終的に、将来シナリオを作成してプレゼンテーションを行う。	1. ファッションプロダクトのサプライチェーンにおける技術課題を理解して、正確に説明ができる。(知識・理解) 2. 課題解決に向けた具体的な情報技術の応用方法を検討して、新しい提案ができる。(思考・判断・表現)	1. ファッションプロダクトのサプライチェーンにおける技術課題を理解して説明ができる。(知識・理解) 2. 課題解決に向けた具体的な情報技術の応用方法を検討して、何らかの提案ができる。(思考・判断・表現)
被服学特別研究	家政学研究科 被服学専攻	1	10	被服に関する専門分野について深く理解した上で学術的な課題を自ら設定し、調査・実験等を含む研究に取り組むことにより、課題を解決するための高度な知識と技能を修得する。担当教員と協働して、新たな学術的・社会的な価値を創出することを目的とした研究に取り組み、修士論文中間発表を行なうことで、研究に対する多様な意見を反映して内容を充実させる。最終的な研究成果を修士論文にまとめて提出し、修士論文審査を受けた上で修士論文発表会において口頭発表、および、質疑応答を行う。被服学特別研究を履修することにより、幅広く深い学識を養い、研究能力または高度の専門的な職業を担うための能力を養う。	1. 専門領域における既往の研究を俯瞰した上で、新たな学術的・社会的な価値の創出が期待される研究課題を設定することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現) 2. 研究課題について学術的な見地から知識・理解を深め、課題を解決することの学術的・社会的な意義を的確に説明でき、専門家と円滑なコミュニケーションがとれる。(思考・判断・表現)(知識・理解) 3. 自ら設定した研究課題について研究方法を多面的に検討し、具体的な研究計画に基づいて研究を実行できる。(思考・判断・表現)(技能) 4. 独創性の認められる学術的な研究成果を、修士論文にまとめることができる。(思考・判断・表現) 5. 被服学特別研究に取り組むことにより、専門的な知識に根差した「問題発見・解決」のための高度な能力を修得している。(関心・意欲・態度)	1. 専門領域における基本的な既往の研究を把握した上で、自ら研究課題を設定することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現) 2. 研究課題について知識・理解を深め、課題を解決することの学術的・社会的な意義を説明できる。(思考・判断・表現)(知識・理解) 3. 自ら設定した研究課題について具体的な研究方法を検討し、研究を実行することができる。(思考・判断・表現)(技能) 4. 得られた学術的な研究成果を、修士論文にまとめることができる。(思考・判断・表現) 5. 被服学特別研究に取り組むことにより、専門的な知識に根差した「問題発見・解決」のための基本的な能力を修得している。(関心・意欲・態度)
栄養学特論I	家政学研究科 食物学専攻	1	2	私たちの身体は、ATPという電池によって動く精巧なロボットのようなものである。しかし、電池と大きく異なり、ATPは細胞内に貯蔵して備えることができない。生きている限り、すべての細胞は常にATPを分解して使用しながら合成し続けなければならない。ATP産生が滞れば非常に短時間で死に至る。生きるためのATPの産生には、①栄養と②酸素の2つが必要であり、どちらかが欠けると深刻な事態となる。このように栄養は、生きるために非常に重要なものである。また、近年増加の一途をたどる生活習慣病の発症に、栄養は深く関与している。本講義では、栄養学について実感を持って深い理解が得られることを目指し、アクティブラーニング形式で体験・参加する。また、最先端の話題についても理解する。各講義のあと、自分の考えやさらに深く調べたいと感じる事柄について毎回発表を行い、議論を行いながら多角的に考察する。	1. 栄養学について総合的に理解し、説明することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現) 2. 栄養学関連の最先端の話題について関心を持ち、自分の考えについて説明することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現)(関心・意欲・態度) 3. 栄養学関連の話題について、関心を持って深く議論することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現)(関心・意欲・態度)	1. 栄養学について総合的に理解することができる。(知識・理解) 2. 栄養学関連の最先端の話題について、自分の考えを持つことができる。(知識・理解)(思考・判断・表現) 3. 栄養学関連の基礎的な話題について、議論に参加することができる。(知識・理解)(思考・判断・表現)

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
栄養学特論II	家政学研究所 食物学専攻	1	2	本授業は、栄養学特論Iの続きとして行われ、引き続き、体験参加型の講義授業として、栄養学への深い理解を目指す。栄養学に関するこれまでの授業内容の中から、テーマを決めて関連する論文を読み、レポートにまとめ、深い理解にもとづいたプレゼンテーションを行う。	1. 栄養学関連の最先端の話題について関心を持ち、自分の考えについて説明することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度） 2. 栄養学関連の話題について、関心を持って深く議論することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度） 3. 栄養学関連における興味のある話題について、国際論文を読み、レポートにまとめて詳しく説明し、自分の考えも含めて科学的根拠に基づき発表することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度）	1. 授業で学んだ栄養学関連の最先端の話題について、自分の考えを説明することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 栄養学関連の話題について、議論に参加することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. 栄養学関連における興味のある話題について、論文を読み、レポートにまとめて説明し、発表することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度）
栄養学演習I	家政学研究所 食物学専攻	1	2	栄養学的分野における、基礎的な理解の問題点を明らかにし、ディスカッションを通じて、修士論文研究遂行のための考え方を習得する。	1. 修士論文の作成にあたり、現在自分が行っている研究および行う予定である研究について、科学的根拠に基づいて詳しく説明を行うことができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 自分の興味の方向性について論理的かつ具体的にディスカッションを行うことができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度） 3. その上で、栄養学的な理解における問題点を明らかにし、研究を遂行するための科学的な考え方をしっかりと習得することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1. 修士論文の作成にあたり、現在自分が行っている研究および行う予定である研究について、基本的事項に関して説明を行うことができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 自分の興味の方向性について説明を行うことができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度） 3. その上で、栄養学的な理解における問題点を明らかにし、研究を遂行するための基本的な考え方を習得することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）
栄養学演習II	家政学研究所 食物学専攻	1	2	酸素は生体にとって不可欠な物質であるが、諸刃の剣と言われている。酸素の存在するところ、一定の割合で活性酸素種が存在することが知られている。スーパーオキシド、過酸化水素、ヒドロキシルラジカルなどの活性酸素種は、エネルギー代謝の過程、生体防御機構の中で常に細胞内外で発生しており、周辺たんぱく質と反応して細胞・組織に対して強い障害を惹起する。その障害性は、生活習慣病に関与していることが報告されている。 本授業では、「活性酸素」「酸化ストレス」「生活習慣病」「血管障害」「糖尿病」「がん」などをキーワードとして、最新の国際誌を読み、理解を深めていく。	1. 授業概要に記した内容に則したディスカッションを通じて、関連分野について理解でき、詳しく説明できるようになる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 最先端の話題についてのディスカッションを繰り返し、研究遂行のための能力や考え方をしっかりと習得する。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1. 授業概要に記した内容に則したディスカッションを通じて、関連分野について理解でき、基本的な説明をできるようになる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 最先端の話題についてのディスカッションを繰り返し、研究遂行のための基本的な考え方を身につける。（知識・理解）（思考・判断・表現）
栄養生理学特論I	家政学研究所 食物学専攻	1	2	傷病者に対する栄養管理においては、傷病者の治療効果を高めるよう栄養管理計画を立て、実行する必要があるが、傷病者に対して効果的な栄養ケアマネジメントを実行するためには、対象者の病態だけでなく、生活の実態に即した栄養介入を計画する必要がある。そこで、本科目では、公衆栄養学に関する英語の原著論文の講読を通じて、集団の健康・栄養状態の評価方法を学ぶ。	1. 栄養管理に関する最新知見を習得する。（知識・理解） 2. 臨床栄養学関連分野の科学的研究手法および統計学的手法を理解する。（知識・理解） 3. 臨床栄養管理における現状の課題を整理し、説明できる。（知識・理解）	1. 臨床栄養学関連分野における、科学的研究手法および統計学的手法により解析された結果を理解し、説明できる。（知識・理解） 2. 臨床栄養管理における課題について、幅広い文献から自分なりの考察をまとめる。（思考・判断・表現）
栄養生理学特論II	家政学研究所 食物学専攻	1	2	集団の健康・栄養状態の問題点を明らかにするためには、その評価方法を理解する必要がある。そこで、本科目では、公衆栄養学に関する英語の原著論文の講読を通じて、集団の健康・栄養状態の評価方法を学ぶ。	1. 食生活などの生活習慣とかわりのある生活習慣病について、評価方法の違いを含めて集団の疾病状況の違いを説明できる。（知識・理解） 2. 複数の大規模研究の論文講読を通じ、食品・栄養素摂取量の評価方法の違いを、妥当性や再現性を含めて説明できる。（知識・理解） 3. 生活習慣病と集団の疾病状況と食品・栄養素摂取量の関連を、評価方法の違いを含めて総合的に説明できる。（技能）	1. 食生活などの生活習慣とかわりのある生活習慣病について、集団の疾病状況の違いを説明できる。（知識・理解） 2. 複数の大規模研究の論文講読を通じ、食品・栄養素摂取量の評価方法の違いを説明できる。（知識・理解） 3. 生活習慣病と集団の疾病状況と食品・栄養素摂取量の関連を説明できる（技能）
栄養生理学特論III	家政学研究所 食物学専攻	1	2	栄養生理学とは、ヒトの健全な生理的機能の発揮に資する栄養学的要件を探索する分野である。しかるに、人体生理学の深い理解と、栄養学の生化学的知識をもとに、現代人に即した新しい栄養のあり方を議論する。本講義では、栄養生理学に関する最先端の研究動向を国内のみならず世界の英語論文から紹介し、その実験的方法論や健康科学的な意義を考察し議論する。	1. 現代の健康科学上の問題点に重要な示唆を与える上質な英語論文を探索できるようになる。（技能） 2. 英語論文を正確に読解し、基礎的および発展的な知識を吸収することができる。（知識・理解） 3. 論文について批判的に考察し、建設的な意見を形成することができる。（思考・判断・表現）	1. 現代の健康科学上の問題点に言及する英語論文を探索できるようになる。（技能） 2. 英語論文の概略を読解し、基礎的な知識を吸収することができる。（知識・理解） 3. 論文について考察し、感想を述べるることができる。（思考・判断・表現）
栄養生理学演習I	家政学研究所 食物学専攻	1	2	傷病者に対する栄養管理においては、傷病者の治療効果を高めるよう栄養管理計画を立て、実行する必要があるが、傷病者に対して効果的な栄養ケアマネジメントを実行するためには、対象者の病態だけでなく、生活の実態に即した栄養介入を計画する必要がある。そこで、本科目では、臨床栄養に関する文献を講読し、傷病者の栄養管理における課題について理解を深める。	1. 栄養管理に関する最新知見を習得する。（知識・理解） 2. 臨床栄養学関連分野の科学的研究手法および統計学的手法を理解する。（知識・理解） 3. 臨床栄養管理における現状の課題を整理し、説明できる。（知識・理解）	1. 臨床栄養学関連分野における、科学的研究手法および統計学的手法により解析された結果を理解し、説明できる。（知識・理解） 2. 臨床栄養管理における課題について、幅広い文献から自分なりの考察をまとめる。（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
栄養生理学演習Ⅱ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	修士論文の研究仮説を明らかにするためには、自身の研究領域における先行研究を把握する必要がある。そこで、本科目では、自身の研究領域における論文検索、系統的な論文レビューを行い、修士論文の研究仮説の設定につなげる。さらに、研究実施の方法論として疫学、統計学の基礎を学ぶ。	1.自身の研究領域における論文を検索し系統的な論文レビューを行い、先行研究で明らかにされている事柄を、整理して説明できる。（知識・理解） 2.先行研究の研究デザインの違いを判別し、科学的エビデンスのレベルの違いを説明できる。（知識・理解） 3.集団の健康状態を評価するために、最も適切な統計解析方法を説明できる。（技能）	1.自身の研究領域における論文を検索し系統的な論文レビューを行い、先行研究で明らかにされている事柄を説明できる。（知識・理解） 2.先行研究の研究デザインの違いを判別して、説明できる。（知識・理解） 3.集団の健康状態を評価するための統計解析方法を説明できる。（技能）
栄養生理学演習Ⅲ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	栄養生理学とは、ヒトの健全な生理的機能の発揮に資する栄養学的要件を探索する分野である。しかるに、人体生理学の深い理解と、栄養学の生化学的知識をもとに、現代人に即した新しい栄養のあり方を議論する。本演習では、学生みずから栄養生理学に関する最先端の研究動向を国内のみならず世界の英語論文から探索し、その実験的方法論や健康科学的な意義を考察し議論する。	1.現代の健康科学上の問題点に重要な示唆を与える上質な英語論文を探索できるようになる。（技能） 2.英語論文を正確に読解し、基礎的および発展的な知識を吸収することができる。（知識・理解） 3.論文について批判的に考察し、建設的な意見を形成することができる。（思考・判断・表現） 4.論文のテーマに基づいて、教員や学生と発展的な議論ができる。（思考・判断・表現）	1.現代の健康科学上の問題点に言及する英語論文を探索できるようになる。（技能） 2.英語論文の概略を読解し、基礎的な知識を吸収することができる。（知識・理解） 3.論文について考察し、感想を述べることができる。（思考・判断・表現） 4.論文のテーマに基づいて、教員や学生と基本的な議論ができる。（思考・判断・表現）
栄養教育論特論Ⅰ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	栄養教育をより効果的に実践していくためには、栄養教育の目的、内容、学習者（対象者）の実態に応じて、教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方などの選択が重要になる。文献・資料を通して、栄養教育の効果的な方法を理解する。	1.栄養教育の目的、内容、学習者（対象者）の実態を把握できる。（知識・理解） 2.栄養教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方を対象者に応じて選択できる。（知識・理解） 3.栄養教育の効果的な方法を理解して、説明できる。（知識・理解）	1.栄養教育の目的、内容を理解できる。（知識・理解） 2.栄養教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方を理解できる。（知識・理解） 3.栄養教育の効果的な方法を理解できる。（知識・理解）
栄養教育論特論ⅠⅠ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	栄養教育とは対象者の栄養改善を図ることにあり、その中で給食は広義の教材・媒体として位置づけられている。本講義ではその給食を提供するにあたってのシステムについて文献・資料を通して給食経営管理の面から考究する。	1.給食システムに関連する研究例を理論的に説明できる。（知識・理解） 2.給食経営管理領域の研究例を体系的かつ理論的に説明できる。（知識・理解） 3.給食経営管理領域の研究テーマを自ら決定し、資料調査・考察・発表ができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1.給食システムに関連する研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 2.給食経営管理領域の研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 3.与えられた給食経営管理領域の研究テーマについて、資料調査・考察・発表ができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）
栄養教育論演習Ⅰ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	栄養教育をより効果的に実践していくためには、栄養教育の目的、内容、学習者（対象者）の実態に応じて、教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方などの選択が重要になる。「栄養教育論特論Ⅰ」より高度な文献を用い、栄養教育の方法論を理解する。	1.栄養教育の目的、内容、学習者（対象者）の実態を把握できる。（知識・理解） 2.栄養教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方を対象者に応じて選択できる。（知識・理解） 3.栄養教育の効果的な方法を理解して、説明できる。（知識・理解）	1.栄養教育の目的、内容を理解できる。（知識・理解） 2.栄養教育の形態、教材・媒体、場所、展開の仕方を理解できる。（知識・理解） 3.栄養教育の効果的な方法を理解できる。（知識・理解）
栄養教育論演習ⅠⅠ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	栄養教育とは対象者の栄養改善を図ることにあり、その中で給食は広義の教材・媒体として位置づけられている。給食経営管理領域の研究を行うためには、給食経営管理領域の知識を有するとともに、研究能力、論文の執筆に関する知識、プレゼンテーション能力等が必要になる。そこで本科目では、修士論文の研究課題に関連する研究論文、書籍、資料などから実験計画、実験方法等、様々な研究手法の論文を検索し、講読することにより、修士論文の研究方法を組み立てることができるようになる。さらには、研究内容を発表する上でプレゼンテーションの技法を修得する。	1.研究課題の詳細な研究計画を適切に決定することができる。（知識・理解） 2.研究課題に関連する論文を多数通読し、自分の研究課題との関連を含め、体系的に説明できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3.効果的なプレゼンテーションの技術を身につけることができる。（知識・理解）（技能）	1.研究課題の基本的な研究計画を決定することができる。（知識・理解） 2.研究課題に関連する論文を多数通読し、自分の研究課題との関連を説明できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3.プレゼンテーションの基礎的な技術を身につけることができる。（知識・理解）（技能）
食品学特論Ⅰ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	食品に含まれる糖質、タンパク質、脂質は、ヒトの活動のエネルギーになるとともに、生体内で重要な働きをしている。これら成分の代謝については、学部で学んでいるはずであるが、十分に理解していない院生が多い。本講義では、これらの成分の代謝について詳説する。	1.糖質の代謝について、学部学生に説明できる。（思考・判断・表現） 2.タンパク質の代謝について、学部学生に説明できる。（思考・判断・表現） 3.脂質の代謝について、学部学生に説明できる。（思考・判断・表現）	1.糖質の代謝について、説明できる。（思考・判断・表現） 2.タンパク質の代謝について、説明できる。（思考・判断・表現） 3.脂質の代謝について、説明できる。（思考・判断・表現）
食品学特論Ⅱ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	微生物を利用した食品の加工は、産業として大規模化するとともに、菌株の育種、品質管理、微生物検査等にも高度の技術を要するようになっている。本講義では微生物を用いた食品加工に関連する最近の進歩や問題点について国内外の文献を精読して理解する。また食品衛生検査についても検査方法の原理と実態について学ぶ。	1.微生物の菌株の維持について、方法を具体的に説明できる。（知識・理解） 2.微生物を用いた発酵食品について、食品ごとに説明できる。（知識・理解） 3.食品衛生検査について、各方法を具体的に説明することができる。（知識・理解） 4.文献を読んで理解し、適切に説明できる。（思考・判断・表現）	1.微生物の菌株の維持について概要を説明できる。（知識・理解） 2.微生物を用いた発酵食品について概要を説明できる。（知識・理解） 3.食品衛生検査について概要を説明することができる。（知識・理解） 4.文献を読んで理解できる。（思考・判断・表現）
食品学特論Ⅲ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	水は、多くの食品に含まれ、食品の物性・機能に大きな影響を及ぼす。それは、水が食品中の他成分と様々な相互作用をする結果と考えられる。本科目で得られる、食品中の水に関する物理化学的取り扱い法に関する知識は、食品加工工学等の学習に活用できる。	1.物質の相転移の概念について、例を述べたうえで説明できる。（知識・理解） 2.食品の成分間相互作用に基づく物理変化について、例を述べたうえで説明できる。（知識・理解） 3.食品の水分収着挙動とガラス転移の概念について、例を述べたうえで説明できる。（知識・理解）	1.物質の相転移の概念について、本を見ながら説明できる。（知識・理解） 2.本を見ながら、食品の成分間相互作用に基づく物理変化について説明できる。（知識・理解） 3.本を見ながら、食品の水分収着挙動とガラス転移の概念について、説明できる。（知識・理解）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
食品学特論Ⅳ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	近年、アレルギーや自己免疫疾患などの疾病が増加している。こうした疾病は、生活環境や生活習慣に起因することが多いとされているが、中でも食生活が生体の免疫機能に及ぼす影響は無視できない。そこで、食品に含まれる栄養成分、添加物および加工助剂などが、ヒト消化管の免疫機能に及ぼす影響について体系的に理解する。また、食品を様々な技術で加工処理することによって、新たに生成するアレルギー物質などについても、国内外の知見を包括的に学ぶ。	1. ヒトの免疫機能における消化管免疫システムの役割について、脾臓やリンパ節などの免疫組織全体を含めて、総合的内容を分子レベルで説明できる。（知識・理解） 2. 食品成分が消化管免疫システムに及ぼす影響について、総合的内容を分子レベルで説明できる。（知識・理解）	1. ヒトの免疫機能における消化管免疫システムの役割について、基礎的内容を説明できる。（知識・理解） 2. 食品成分が消化管免疫システムに及ぼす影響について、基礎的内容を説明できる。（知識・理解）
食品学演習Ⅰ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	糖質、タンパク質、脂質の代謝に関連する英語論文を読み、その内容について発表を行い、相互に討論する。	1.糖質の代謝に関する英語論文の内容を発表し、質問に対して適確に答えられる。（思考・判断・表現） 2.タンパク質の代謝に関する英語論文の内容を発表し、質問に対して適確に答えられる。（思考・判断・表現） 3.脂質の代謝に関する英語論文の内容を発表し、質問に対して適確に答えられる。（思考・判断・表現）	1.糖質の代謝に関する英語論文の内容を発表できる。（思考・判断・表現） 2.タンパク質の代謝に関する英語論文の内容を発表できる。（思考・判断・表現） 3.脂質の代謝に関する英語論文の内容を発表できる。（思考・判断・表現）
食品学演習Ⅱ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	微生物を用いた食品加工および物質生産は、バイオテクノロジーの発展と共に進歩が著しい。本演習では最新の知見を文献を通して知り、その内容を発表して討論することで理解を深める。	1.微生物の代謝や機能について具体的に説明でき、質問に的確に答えられることができる。（思考・判断・表現） 2.微生物を用いた物質生産に関する英語論文を精読し理解できる。（知識・理解） 3.微生物を用いた物質生産についてスライドを作成して発表し、討論することができる。（思考・判断・表現）	1.微生物の代謝や機能について具体的に説明できる。（思考・判断・表現） 2.微生物を用いた物質生産に関する英語論文を理解できる。（知識・理解） 3.微生物を用いた物質生産についてスライドを作成して発表することができる。（思考・判断・表現）
食品学演習Ⅲ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	食品科学といえば、生化学・栄養学や分析化学を考えがちだが、物理化学もしくは工学的アプローチが重要な場面は多い。本講義では、物理や工学になじみのない学生を対象に、食品分野における物理化学や工学の重要性を説明し、その考え方が理解できるようになる。	1.物理化学や工学と食品製造との関係を理解し、説明できる。（知識・理解） 2.物理化学や工学の基本的な計算ができる。（知識・理解） 3.物理化学と化学工学の差異に関して理解できる。（知識・理解）	1.物理化学や工学と食品製造との関係を本を見ながら説明できる。（知識・理解） 2.本を見ながら、物理化学や工学の基本的な計算ができる。（知識・理解） 3.本を見ながら、物理化学と化学工学の差異に関して説明できる。（知識・理解）
食品学演習Ⅳ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	平成25年4月から新たに導入された「健康日本21（第2次）」においては、基本方針として「健康寿命の延伸と健康格差の縮小」、「生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底」および「社会生活を営むために必要な機能の維持及び向上」などが掲げられている。日常的な食生活が健康に及ぼす影響については、これまで骨粗鬆症、サルコペニア、齲蝕、歯周病、循環器系疾患、癌などの予防の観点から、多くの研究がなされている。そこで、中高齢者のメタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームの予防に、食品成分がどのように寄与しているのかについて、国内外の知見を包括的に理解する。	1.メタボリックシンドローム予防における食品成分の機能について、国内外の知見をまとめた総合的内容を分子レベルで説明できる。（知識・理解） 2.ロコモティブシンドローム予防における食品成分の機能について、国内外の知見をまとめた総合的内容を分子レベルで説明できる。（知識・理解）	1.メタボリックシンドローム予防における食品成分の機能について、国内外の知見をまとめた基礎的内容を説明できる。（知識・理解） 2.ロコモティブシンドローム予防における食品成分の機能について、国内外の知見をまとめた基礎的内容を説明できる。（知識・理解）
調理学特論Ⅰ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	澱粉質食品(澱粉を含む食品)を対象とし、調理過程に起こる問題解決のための研究方法や新素材を用いた調理・加工適性の解明法を学び、自らが必要とする調理学的研究を企画・実施する力を養うための科目である。これまでの調理学関連の研究例から、調理学関連の研究の組み立て方、研究方法の選択方法、結果から得られる考察および発表の仕方を学び、身につけることができる。研究方法の選択には、調理学研究に必要な物理化学および組織学の実験手法、官能評価の方法を理解することが必要であるため、それらの基礎的および先進的な研究方法を理解できるようになる。また、目的に応じた調理学的研究の立案、実施、考察および発表する能力を身につけ、今後の研究生活に生かすことができるようになる。調理学特論Ⅱを先に受講することが可能である。	1.澱粉質食品を用いた調理学関連の研究例を理論的に説明できる。（知識・理解） 2.調理学研究に必要な物理化学および組織学の実験手法、官能評価の基礎的および先進的な方法を説明することができる。（知識・理解） 3.目的に応じた調理学的研究を立案・実施内容を発表し、質問に対して理論的に答えられることができる。（知識・理解）(思考・判断・表現)	1.澱粉質食品を用いた調理学関連の研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 2.調理学研究に必要な物理化学および組織学の実験手法、官能評価の基礎的な方法を説明することができる。（知識・理解） 3.目的に応じた調理学的研究を立案・実施内容を発表し、質問に対して簡単に答えられることができる。（知識・理解）(思考・判断・表現)
調理学特論Ⅱ	家政学研究科 食物学専攻	1	2	成分抽出素材「澱粉」を対象として、調理学関連の研究の進め方、研究に対する考え方を学ぶ。研究目的・研究方法の設定、得られた結果の解析・考察の仕方等を実際の研究論文を通読することで身につける。調理・加工食品は多数の食品や調味料等が相互に影響しあったり、複雑な調理操作が加わったり、その現象をとらえるためには様々な知識・技術を要する。本科目は調理学関連の研究を進める上で必要な基礎的および先進的な知識を吸収するとともに、高い研究能力を身につけ、今後の研究生活に活かすことができる学修内容である。調理学特論Ⅱを特論Ⅰの前に受講することが可能である。	1.成分抽出素材「澱粉」に関連する研究例を理論的に説明できる。（知識・理解） 2.調理学関連の研究例を体系的かつ理論的に説明できる。（知識・理解） 3.調理学関連の研究テーマを自ら決定し、資料調査・考察・発表ができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1.成分抽出素材「澱粉」に関連する研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 2.調理学関連の研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 3.与えられた調理学関連の研究テーマについて、資料調査・考察・発表ができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
調理学演習	家政学研究科 食物学専攻	1	2	調理学領域の研究を行うためには、調理学関連の知識を有するとともに研究能力、論文執筆に関する知識、プレゼンテーション能力等が必要になる。そこで修士論文の課題に関する書籍、研究論文、資料等から化学的、物理的、組織的実験方法、官能評価を用いた研究方法、調査研究方法等、様々な研究手法の論文を検索、通読し、修士論文の実験計画に適した研究方法を組み立てる。また、論文執筆に関する知識を深め、プレゼンテーションの技術を習得する。本科目は修士論文の執筆・発表をするために必要な学修内容であり、研究分野で活躍するために必要最低限身につけなければならない内容である。	1. 研究課題の詳細な研究計画を適切に決定することができる。（知識・理解） 2. 研究課題に関連する論文を多数通読し、自分の研究課題との関連を含め、体系的に説明できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. 効果的なプレゼンテーションの技術を身につけることができる。（知識・理解）（技能）	1. 研究課題の基本的な研究計画を決定することができる。（知識・理解） 2. 研究課題に関連する論文を多数通読し、自分の研究課題との関連を説明できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. プレゼンテーションの基礎的な技術を身につけることができる。（知識・理解）（技能）
食物学特別研究	家政学研究科 食物学専攻	1	10	修士論文の作成へ向けて、各自研究テーマを設定し、研究計画を立てて研究を遂行する。研究過程において、問題解決のための課題設定および解決方法を自ら考案し、主体的に研究を進められるようになる。また論文作成に必要な知識および情報を取得する技術を深め、教員の指導のもとに論文を作成し、プレゼンテーションする技術を修得する。	1. 研究テーマを全体および一部を独自で設定できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 研究計画を独力で立てることができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. 主体的に研究を遂行することができる。（技能） 4. 研究中に発生した問題点について、解決方法を自ら考案できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 5. 研究結果をまとめ、科学的に多面的に考察することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 6. 修士論文を指導に頼らず主体的にまとめることができる。（技能）（思考・判断・表現） 7. 研究成果を発表し、積極的に討論できる。（思考・判断・表現）	1. 研究テーマの一部を独自で設定できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. 研究計画を指導のもとに立てることができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. 指導のもとに研究を遂行することができる。（技能） 4. 研究中に発生した問題点について、解決方法を指導のもとに考案できる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 5. 研究結果をまとめ、考察することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 6. 修士論文を指導のもとにまとめることができる。（技能）（思考・判断・表現） 7. 研究成果を発表し討論できる。（思考・判断・表現）
建築・デザイン特別研究第1	家政学研究科 建築・デザイン専攻	1	4	博士前期課程の授業などを通じて必要な知識を身につけ、その分野で自らテーマを設定し、研究計画を構築し、指導教員からアドバイスを受けながら研究を遂行し、適宜、報告・発表を行い、問題設定の妥当性、結果の意義を議論しながら研究を特別研究第1・2・3と進め、最終的に修士論文・修士制作に纏め上げる。	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索が十分にできる（技能） ・引用等が適切で、論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述や展開が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討・吟味できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にし、論理展開に一貫制を持たせることができる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索ができる（技能） ・論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にできる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）
建築・デザイン特別研究第2	家政学研究科 建築・デザイン専攻	1	4	博士前期課程の授業などを通じて必要な知識を身につけ、その分野で自らテーマを設定し、研究計画を構築し、指導教員からアドバイスを受けながら研究を遂行し、適宜、報告・発表を行い、問題設定の妥当性、結果の意義を議論しながら研究を特別研究第1・2・3と進め、最終的に修士論文・修士制作に纏め上げる。	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索が十分にできる（技能） ・引用等が適切で、論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述や展開が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討・吟味できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にし、論理展開に一貫制を持たせることができる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索ができる（技能） ・論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にできる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）
建築・デザイン特別研究第3	家政学研究科 建築・デザイン専攻	2	6	博士前期課程の授業などを通じて必要な知識を身につけ、その分野で自らテーマを設定し、研究計画を構築し、指導教員からアドバイスを受けながら研究を遂行し、適宜、報告・発表を行い、問題設定の妥当性、結果の意義を議論しながら研究を特別研究第1・2・3と進め、最終的に修士論文・修士制作に纏め上げる。	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索が十分にできる（技能） ・引用等が適切で、論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述や展開が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討・吟味できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にし、論理展開に一貫制を持たせることができる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）	・問題が明確で、テーマ設定が適切に設定できる（知識・理解） ・事実調査・文献資料などの探索ができる（技能） ・論文としての体裁が整えられる（技能） ・調査分析の内容の記述が合理的に行える（技能）、（思考・判断・表現） ・先行研究を検討できる（思考・判断・表現） ・分析方法を明確にできる（思考・判断・表現） ・結果としての結論や「かたち」にオリジナリティを待たせることができる（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
特論 伝達デザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	伝達デザインⅠでは、ダイアグラム、ピクトグラム、パッケージを課題に取り上げ、自ら戦略を導き出し、そこから機能する豊富なアイデアを出し、それらを選択し、デザイン技術を持って表現出来る力を身につける。問題提起から提案を行い、具体的な制作作品と書類によってプレゼンテーションできる技術を修得する。	・近年の急速な産業構造の変化により、伝達デザインの機能も変化している。その原点の探究を基に、ここでは公益性のあるテーマに臨む。具体的には、産業デザインのみならず、環境問題に取り組み、今までに獲得したデザインの知識・理解を総合的に活用できるようになる。（知識・理解） ・環境問題に対し、デザインで提案できる技能が身につく。（技能） ・テーマを深く掘り下げる事により思考・判断力が付くようになる。（思考・判断・表現） ・世の中に対する関心が深まり意欲を持って取り組む事ができる。社会に広く貢献する意欲が高まる。（関心・意欲・態度）	・近年の急速な産業構造の変化により、伝達デザインの機能も変化している。その原点の探究を基に、ここでは公益性のあるテーマに臨む。具体的には、産業デザインのみならず、環境問題に取り組み、今までに獲得したデザインの知識・理解を総合的に活用できるようになる。（知識・理解） ・環境問題に対し、デザインで提案できる技能が身につく。（技能） ・テーマを深く掘り下げる事により思考・判断力が付くようになる。（思考・判断・表現）
特論 伝達デザインⅡ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	人やモノ、空間がネットワークでつながり、生活様式が絶えず変化していく現在、それに対応すべく情報伝達のあり方も変わり続けている。伝達デザインⅡでは、生活における様々な情報伝達の枠組みのなかでも視覚的分野を主な対象に、その基礎的知識や技術を修得する。社会的な視点から生活者が媒体を通して起こす行動を観察することで、デザインに生かすための手法、デザインのプロセスを理解する。講義の課題として問題提起や解決策の提案を行い、具体的な制作作品と書類によるプレゼンテーション技術を身につける。	・人々の生活における様々な視覚媒体、その背景にある生活者の行動や社会問題を総合的に理解することにより、視覚伝達デザインに関わる知識を身につけることができる。（知識・理解） ・視覚伝達デザインの高度な技術と思考を習得し、問題提起から提案を行い判断し、企画書やレポートによる、実践的なプレゼンテーションをすることができる。（思考・判断・表現） ・自らの考えを発展した具体的なデザイン作品を提案できる。（技能） ・作品の完成へ向けて、リサーチ・発想・プランニング・視覚化・提案・実行・改良のデザインプロセスを通じ、問題解決を能動的に取り組むことができる。（関心・意欲・態度）	・人々の生活における様々な視覚媒体、その背景にある生活者の行動や社会問題を総合的に理解することにより、視覚伝達デザインに関わる知識を身につけることができる。（知識・理解） ・視覚伝達デザインの高度な技術と思考を習得し、問題提起から提案を行い判断し、企画書やレポートによる、実践的なプレゼンテーションをすることができる。（思考・判断・表現） ・自らの考えを発展した具体的なデザイン作品を提案できる。（技能）
特論 プロダクトデザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	人はデザインを通じて毎日の生活の姿を形作っている。デザインとは、深く生活を理解し造形によって最適な生活提案をすることも言える。本特論では、より良い生活が必ずしも量的な多さ・物質的な豊かさの追求ではないことに気付きつつある現代において、人間や社会の多様性、環境への配慮等を備えた製品企画に基づき、調和のとれた生活を支えるデザインとはいかなるものか考察する。	・生活の場における「人」と「もの」との関係について学び、美的な生活に関するプロダクトデザインのかかわりを考え述べる事ができる。（知識・理解） ・現状調査、分析することができる。（技能）、（思考・判断・表現） ・検討した結果としてカタチの提案ができる。（技能）、（思考・判断・表現） ・プロダクトデザインにおける「美的要素」、「社会性」、「機能・構造・材料・製造技術」、「販売」、「使用後の処理」を理解し説明することができる。（知識・理解）	・生活の場における「人」と「もの」との関係について学び、美的な生活に関するプロダクトデザインのかかわりを考え述べる事ができる。（知識・理解） ・現状調査、分析することができる。（技能）、（思考・判断・表現） ・検討した結果としてカタチの提案ができる。（技能）、（思考・判断・表現）
特論 プロダクトデザインⅡ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	21世紀に入って、人間を取り巻く環境は著しく変化している。無限と思われた地球環境は有限である事に私たち現代人は直面している。人間が作り出したプロダクト製品は、単に生産して消費する今のシステムの見直しをしなければならない。そのような大きな視点からこの特論はプロダクトデザインの在り方、提案をする。そのテーマについては担当教員との協議により決定する。	・21世紀に入って、人間を取り巻く環境は著しく変化している。無限と思われた地球環境は有限である事に私たち現代人は直面している事実の知識を得て、理解できる。人間が作り出したプロダクト製品は、単に生産して消費するシステムの見直しを考えなければならない事を理解できる。（知識・理解） ・そのような大きな視点からこの特論はプロダクトデザインの在り方、提案できるようになる。（思考・判断・表現） ・そして、プロダクト作品制作を通して提示する事ができる。（技能） ・テーマについては担当教員との協議により決定する事により社会と自分との関係に関心が向かい意欲が増す。（関心・意欲・態度）	・21世紀に入って、人間を取り巻く環境は著しく変化している。無限と思われた地球環境は有限である事に私たち現代人は直面している事実の知識を得て、理解できる。人間が作り出したプロダクト製品は、単に生産して消費するシステムの見直しを考えなければならない事を理解できる。（知識・理解） ・そのような大きな視点からこの特論はプロダクトデザインの在り方、提案できるようになる。（思考・判断・表現） ・そして、プロダクト作品制作を通して提示する事ができる。（技能）
特論 マーケティング	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	企業そのものや製品等をまず戦略的な思考からマーケットを導き出し、デザインが考えられるようになる。具体的には、60年代より半世紀に渡りアメリカにおいて築き上げてきた広告メソッドを研鑽し、それを学生により分かりやすくテキストとした「4Steps Planning Methods」と「Buying System」を使い解説する。デザインの制作に取りかかる前に、市場の知識を得、消費者の心理（コンシューマーマインサイトを）を理解し、ビジネスで重要な書類（ステートメント）をフォーマットに則して制作する技能を取得する。その上でデザイン制作ができるようになり、相手に対し論理的な説得力のある思考と表現ができるようになる。	・企業そのものや製品等をまず戦略的な思考からマーケットを導き出し、デザインが考えられるようになる。60年代より半世紀に渡りアメリカにおいて築き上げてきた広告メソッドを研鑽し、テキストとした「4Steps Planning Methods」と「Buying System」を使い解説を受ける事により知識・理解ができるようになる。デザインの制作に取りかかる前に市場の知識を得、消費者の心理（コンシューマーマインサイトを）を理解できるようになる。（知識・理解） ・ビジネスで重要な書類（ステートメント）をフォーマットに則して制作する技能を取得する。（技能） ・その上でデザイン制作をして、相手に対し論理的な説得力のある思考と表現ができるようになる。（思考・判断・表現） ・私たちの生活を取り巻く市場に関心を持ち、生活者としての意欲が高まる。（関心・意欲・態度）	・企業そのものや製品等をまず戦略的な思考からマーケットを導き出し、デザインが考えられるようになる。60年代より半世紀に渡りアメリカにおいて築き上げてきた広告メソッドを研鑽し、テキストとした「4Steps Planning Methods」と「Buying System」を使い解説を受ける事により知識・理解ができるようになる。デザインの制作に取りかかる前に市場の知識を得、消費者の心理（コンシューマーマインサイトを）を理解できるようになる。（知識・理解） ・ビジネスで重要な書類（ステートメント）をフォーマットに則して制作する技能を取得する。（技能） ・その上でデザイン制作をして、相手に対し論理的な説得力のある思考と表現ができるようになる。（思考・判断・表現）
特論 構造デザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	構造デザインに必要な構造的基礎知識を認識しつつ、目的に合致した形を作り出すことを身につける。また、構造デザインに役立つ建築・構造以外の分野の知見も考察する。	・設計する建築の用途、目的に最適な構造のデザインを行うための専門知識を具体的に説明できる（知識・理解） ・設計する建築の用途、目的に最適な構造の形にできるデザイン手法を駆使できる（技能） ・設計する建築の用途、目的に最適な構造計画ができるようになる（思考・判断・表現）	・設計する建築の用途、目的に合った構造のデザインを行うための専門知識を具体的に説明できる（知識・理解） ・設計する建築の用途、目的に合った構造計画ができるようになる（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
特論 構造デザインⅠ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	構造デザインに必要な構造的基礎知識を認識しつつ、目的に合致した形を作り出すことを身につける。また、構造デザインに役立つ建築・構造以外の多岐にわたる分野の知見も考察する。	・設計する建築の用途、目的に最適な構造のデザインを行うための専門知識を具体的に説明できる（知識・理解） ・設計する建築の用途、目的に最適な構造の形にできるデザイン手法を駆使できる（技能） ・設計する建築の用途、目的に最適な構造計画ができるようになる（思考・判断・表現）	・設計する建築の用途、目的にあった構造のデザインを行うための専門知識を具体的に説明できる（知識・理解） ・設計する建築の用途、目的にあった構造計画ができるようになる（思考・判断・表現）
特論 建築形態論Ⅰ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	建築空間は有形の「もの」を要素として人の生活、活動環境に合わせて、それらを一定の原則に従って構成することにより成り立ち「かたち」を形成している。本講義では「もの」「かたち」の視覚的特性を検討し、それらの組み合わせ方を豊富な建築空間の実例を通して考察する。	・建築を構成する幾何学的形態の視覚的特性を説明できる（知識・理解） ・建築空間を構成する基本形態（構造、素材、環境）を説明できる（知識・理解） ・幾何学立体の組合せパターンを説明できる（知識・理解） ・建築空間を創る際の形態操作ができる（技能） ・これらの知識を実際の設計に生かすスキルを生かすことができる（思考・判断・表現）	・建築を構成する幾何学的形態の視覚的特性を説明できる（知識・理解） ・建築空間を構成する基本形態（構造、素材、環境）を説明できる（知識・理解） ・幾何学立体の組合せパターンを説明できる（知識・理解）
特論 建築形態論Ⅱ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	住居はnLDKに代表されるようにプライバシーを重視した核家族のみの器としてつくられてきた。現在、高齢者、単身者、DINKS、在宅ワーク等様々なライフスタイル、ライフステージの人達が都市には暮らし、その住まいは多様な関係を調整する必要性が生じている。したがって、住居を設計するためには、多様な要素とデザインの間関係を把握しなくてはならない。本講義では、特に周辺環境、プログラム、構造などの要素に着目して、それらの要素からどのようなプロセスで、形態が決定されるのかを、実際のプロジェクトを考察し、住居を設計するにあたって必要となる実際的な技術や知識を身につける。	・建築、特に住居の設計や計画に関わる諸問題を多角的に解釈することができる（知識・理解） ・身につけた知識を形態の操作につなげることができる技術を駆使できる（技能） ・実際のプロジェクトのプロセスをたどることにより、建築設計の実務の内容や流れを概括的に把握し、職能へのイメージを持ち仕事で表現できる（関心・意欲・態度） ・インターンシップを行う前に、建築設計者としての責任の重要性等実務を行う上で必要な知識を応用し協調することができる（関心・意欲・態度）	・建築、特に住居の設計や計画に関わる諸問題を解釈することができる（知識・理解） ・身につけた知識を形態の操作につなげることができる技術を駆使できる（技能） ・実際のプロジェクトのプロセスをたどることにより、職能へのイメージを持ち仕事で表現できる（関心・意欲・態度）
特論 建築空間計画Ⅰ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	戦後の集合住宅を中心とした都市居住の計画のあり方について、実際の事例を通して考察する。その中でも、家族構成の変化や住み手の高齢化に対応した住生活空間の計画手法、集合住宅の再生（リノベーション）、集合住宅への用途変更（コンバージョン）など、現代の集合住宅を取り巻く様々な計画手法やマネジメントについて、設計者としての観点から認識し理解する。	・戦後の集合住宅を中心とした都市居住を調査分析することにより、建築と人々の生活、それを取り巻く社会状況の変化との関係を説明できる（知識・理解） ・それらの計画・設計プロセス、監理における設計者としての留意すべき点、POE・LCC・PFI、リノベーションやコンバージョン、建て替え事業などについて説明できる（知識・理解） ・インターンシップ受講前に、建築設計者としての責任の重要性など実務を行う上で必要な知識を応用し示すことができる（関心・意欲・態度）	・戦後の集合住宅を中心とした都市居住を調査分析することにより、建築と人々の生活、それを取り巻く社会状況の変化との関係を説明できる（知識・理解） ・それらの計画・設計プロセス、監理における設計者としての留意すべき点などについて説明できる（知識・理解）
特論 建築空間計画Ⅱ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	人間の生活の場となりうる空間を包含する病院・学校・高齢者福祉施設・児童福祉施設は、それらを取り巻く社会環境の変化に伴い、日々絶えず変化している。本講義では、それらの建築空間を対象として、必要とする諸室と諸室群の構成の計画手法に関する基礎的知識を学び、そこで生活する人々、特に子どもや高齢者などの行動特性を観察することで、設計に活かすための建築計画手法、設計のプロセスを身につけ、さらには設計監理、公共建築の維持管理手法も身につける。	・公共建築と人々の生活、その背景にある社会的問題を総合的に理解することによって、公共建築空間の設計計画に関わる知識を具体的に述べることができる（知識・理解） ・インターンシップ受講前に、設計者の立場から公共施設を維持管理していくためのマネジメント手法や意匠設計者が留意すべき監理における要点が応用し示すことができる（関心・意欲・態度）	・公共建築と人々の生活、その背景にある社会的問題を総合的に理解することによって、公共建築空間の設計計画に関わる知識を具体的に述べることができる（知識・理解）
特論 環境デザインⅠ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	地球を一つのシステムとしてとらえて、サステナビリティ（持続可能性）をキーワードに、人間活動の結果として生じた地球環境問題の原因や問題改善策について考察し議論を行い、理解を深める。	・授業内容を深く理解し、大学院で研究を進めるために必要な力を身につけ、それぞれの分野で応用できる（知識・理解）	・授業内容を理解し、大学院で研究を進めるために必要な力を身につけることができる（知識・理解）
特論 環境デザインⅡ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	建築計画的アプローチと環境工学的アプローチの統合を目指して、それぞれの方法論、設計プロセス、事例について議論し考察する。サステナビリティ（持続可能）な社会において、より必要となることは何かを考察する。	・快適な住生活を営むために必要な室内環境の在り方と住宅設備に関する知識を関係づけることができるようになる（知識・理解） ・環境・設備システムに関する最新技術と情報を身につけ、これらをすることができる（知識・理解） ・中高専修免許（家庭）に関連して、住生活の構成と計画について具体的に述べることができる（知識・理解） ・実際の計画・設計に生かせる環境共生システムの技術と考え方を身につけ応用できる（技能）、（思考・判断・表現） ・インターンシップを行う上で建築設計者として必要な建築設計における考え方等の必要な知識を身に付け示すことができる（関心・意欲・態度）	・快適な住生活を営むために必要な室内環境の在り方と住宅設備に関する知識を関係づけることができるようになる（知識・理解） ・環境・設備システムに関する最新技術と情報を身につけ、これらをすることができる（知識・理解） ・実際の計画・設計に生かせる環境共生システムの技術と考え方を身につけ応用できる（技能）、（思考・判断・表現）
特論 都市景観デザインⅠ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	文献研究やフィールドワークなどを通じて、都市景観について理解する。おもに実践的なフィールドワークを通じて、その問題を分析し、都市景観にかかわる基本的な項目を理解する。町並み、道路景観、建物や土木建造物、乗り物、水辺、緑地、照明計画そして電柱や広告などの景観阻害要因についても考察する。条例や協定などの景観にかかわる規制や海外事情についても考察する。	・都市を形成する各要素について、具体的な例をあげて、それをどう変えてゆか、どう維持するかなどを議論し評価できるようになる（知識・理解） ・「中高専修免許（家庭）」に関連して、生活環境と福祉/住生活関連法規について具体的に述べることができる（知識・理解） ・他方で先進事例をながめてその制度的な背景を考える、評価し具体的に述べることができるようになる（思考・判断・表現）	・都市を形成する各要素について、それをどう変えてゆか、どう維持するかなどを議論し評価できるようになる（知識・理解） ・他方で先進事例をながめてその制度的な背景を考える、評価し具体的に述べることができるようになる（思考・判断・表現）



科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標 (成績評価A)	単位修得目標 (成績評価C)
特論 都市景観デザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	近代以降、日本の都市環境は様々な模索を繰り返しながら、現在に至っている。スクラップアンドビルドによってつくり出されたこれらの街並は限界を迎え、現代ではこれらをどのように維持整備していくか、修景していくかといった考え方が主流となってきている。これからの住宅地の景観デザイン手法を習得するため、その基礎となる単体規定や集団規定などの法制度と景観デザインに対する意識のあり方、伝統的まちなみの景観保存・修景手法について考察する。	・建築がつくり出す街並みについて、住宅地とそれを形成する最小単位である住宅がつくりだす都市景観という観点から、近代以降の住宅地の様々な事例を提示し、それらが形成されるまでのプロセスとその背景にある社会状況、欧米と日本の景観に対する意識の違い、景観条例・法制度など景観に関連したルール、景観保存・修景手法について具体的に述べ評価できるようになる。(知識・理解)・これらのことを理解することで現実の問題を分析し対応できるようになる(思考・判断・表現)	・近代以降の住宅地の様々な事例を提示し、それらが形成されるまでのプロセスとその背景にある社会状況、欧米と日本の景観に対する意識の違いを具体的に述べ評価できるようになる。(知識・理解)
特論 住生活デザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	地球上のあらゆる場所で営々と繰り広げられてきた人の営み。それらは、それぞれの地域の気候風土と社会背景の中で培われ育まれ、「すまいかた」と「すまいのかたち」の有機関係を変貌しつつも、それぞれの時代において成り立たせていた。時代の変革期である今日、「ひと」、「もの」、「空間」の関係を再構築するために、文献研究・フィールドワークなどを通じてその方策を考察し、住空間の計画とインテリアデザインに関する知識と技術を身につける。	・「中高専修免許(家庭)に関連して、住生活と文化について説明することができる(知識・理解)・本来の「ひと」、「もの」、「空間」の有機関係を理解している。「ひと」、「もの」、「空間」に関する文献研究・デザインサーベイ手法を実施できる(技能)・過去・現在における「もの」、「空間」の実践的分析能力で考察し応用できる(思考・判断・表現)・調べ上げた結果を表現することができるようになる(思考・判断・表現)	・本来の「ひと」、「もの」、「空間」の有機関係を理解している。「ひと」、「もの」、「空間」に関する文献研究・デザインサーベイ手法を実施できる(技能)・調べ上げた結果を表現することができるようになる(思考・判断・表現)
特論 住生活デザインⅡ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	住生活デザインを踏まえ、住生活に関してさらに深く考察し、これからの住まい方にふさわしい住生活デザインはいかなるものかを考察し提案する。論文またはそれに関する成果物としてまとめる。住生活デザインに関する社会の要望に応え得る知識と技術を身につけることをめざす。	・現状調査、分析することができる。(技能)、(思考・判断・表現) ・住生活を深く広く見据えることのできる洞察力と問題を指摘することができる。(思考・判断・表現) ・住生活に置ける問題について解決するアイデアを生み出すことができる。(思考・判断・表現) ・アイデアから具体的な提案として表現することができるようになる。(技能)、(思考・判断・表現)	・現状調査、分析することができる。(技能)、(思考・判断・表現) ・住生活を深く広く見据えることのできる洞察力と問題を指摘することができる。(思考・判断・表現) ・住生活に置ける問題について解決するアイデアを生み出すことができる。(思考・判断・表現) ・アイデアから具体的な提案として表現することができるようになる。(技能)、(思考・判断・表現)
特論 パブリックデザインⅠ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	前半は交通を主とした移動手段における表示の問題点を取り上げ、より高度な視覚伝達を研究する。後半は街の公共性に寄与する現実的な課題として、千代田区の喫煙歩行禁止の促進をめざす視覚伝達デザインを提案する。	・視覚コミュニケーションの観点から、生活により寄与する公共のためのデザインについて理解出来るようになる。(知識・理解) ・特に交通のサインシステムと地域や街に貢献するデザインをとりあげて深く掘り下げて研究し、問題把握とそれを解決方法を追求出来るようになる。(思考・判断・表現) ・公共に対するデザイン提案ができるようになる。(技能)、(思考・判断・表現) ・デザインを公共に役立てる力を養う。(技能)、(思考・判断・表現)	・視覚コミュニケーションの観点から、生活により寄与する公共のためのデザインについて理解出来るようになる。(知識・理解) ・公共に対するデザイン提案ができるようになる。(技能)、(思考・判断・表現) ・デザインを公共に役立てる力を養う。(技能)、(思考・判断・表現)
特論 パブリックデザインⅡ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	文献研究・フィールドワークなどを通じて、パブリックデザインについて学びその方策を研究していく。おもに実践的なフィールドワークを通して、その問題を分析し、新たなデザイン的な提案を行うことをめざす。パブリックデザインは、欧州で盛んな研究テーマであることから、公共サインのありかた、サイン・広告の基準や制度、科学的な研究、先進デザインを学びつつ、チームでの作業や実践を通じた活動で、この分野についての理解を深める。	・文献研究・フィールドワークなどを通じて、パブリックデザインについて学びその方策を研究し知識と理解ができる。(知識・理解) ・パブリックデザインは、欧州で盛んな研究テーマであることから、公共サインのありかた、サイン・広告の基準や制度、科学的な研究、先進デザインを学びつつ、チームでの作業や実践を通じた活動で、この分野についての理解を深める事ができる。(知識・理解) ・実践的なフィールドワークを通して、その問題を分析し、新たなデザイン的な提案を行う事ができる。(思考・判断・表現) ・それにより具体的なデザイン提案ができる技能が得られる。(技能) ・その提案が公共とどのような効果をもたらすか理解でき、社会に対する関心や意欲が深まる。(関心・意欲・態度)	・文献研究・フィールドワークなどを通じて、パブリックデザインについて学びその方策を研究し知識と理解ができる。(知識・理解) ・パブリックデザインは、欧州で盛んな研究テーマであることから、公共サインのありかた、サイン・広告の基準や制度、科学的な研究、先進デザインを学びつつ、チームでの作業や実践を通じた活動で、この分野についての理解を深める事ができる。(知識・理解) ・実践的なフィールドワークを通して、その問題を分析し、新たなデザイン的な提案を行う事ができる。(思考・判断・表現) ・それにより具体的なデザイン提案ができる技能が得られる。(技能)
特論 住生活史Ⅰ	家政学研究所 建築・デザイン 専攻	1	2	日本の都市・建築は、近代化と引き換えに、これまでその地域に根ざし創られてきた歴史的・文化的環境をスクラップアンドビルドという再生手法で取り壊す場合が多かった。住みややすさは、施設が新しくすれば良いというわけではなく、新しいものと古い歴史的・文化的なものとの組み合わせり溶け合うことで、サスティナビリティな社会を創る上で重要なことである。本講義では、歴史的な住生活と住文化を育みながら現在も生き続けている事例を対象にして、そこにどのようなデザインが展開されているかを考察する。	・歴史の中で、住生活における「ひと」と「もの」と「空間」の有機関係について説明できる(知識・理解)・「ときのめぐり」と「ときのながれ」のなかで、「うつろうもの」と「ときわのもの」を洞察し、それらの関係を説明できる(知識・理解)・「中高専修免許(家庭)に関連して、住生活と文化について説明できる(知識・理解)・それらの関係を考察し問題点を指摘することができるようになる(思考・判断・表現)	・歴史の中で、住生活における「ひと」と「もの」と「空間」の関係について理解する(知識・理解)・「ときのめぐり」と「ときのながれ」のなかで、「うつろうもの」と「ときわのもの」の関係を説明できる(知識・理解)・それらの関係を指摘することができるようになる(思考・判断・表現)

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
特論 住生活史Ⅰ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	2	私たちの住環境は、住まいと人の生活に必要な生活支援施設が複合して成り立っている。それらの歴史的な建築を取り上げ、歴史的・文化的な観点から生活者の目線にたつてその住空間の構成の特性を考察する。さらに、再生・活用の方策を技術的な問題を含めて検証し、歴史・文化・生活者の背景を考慮した住空間の計画能力を身につける。	・歴史・文化・生活者の観点から、住まいと生活支援施設の関係の説明ができる（知識・理解） ・過去と現在の住環境を考察し、「うつろうもの」と「ときわのもの」の関係の説明ができる（知識・理解） ・「中高専修免許（家庭）に関連して、住生活と文化について説明できる（知識・理解） ・それらの関係を考察し問題点を指摘することができるようになる（思考・判断・表現） ・「住生活史Ⅰ」で研究したテーマを現在に活かす手法を表現することができる（思考・判断・表現）	・歴史・文化・生活者の観点から、住まいと生活支援施設の関係の説明ができる（知識・理解） ・過去と現在の住環境を考察し、「うつろうもの」と「ときわのもの」の関係の説明ができる（知識・理解） ・それらの関係を指摘することができるようになる（思考・判断・表現）
建築設計Ⅰ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	4	担当教員が設けるスタジオに学生が参加し実務にそった設計の流れにより設計を行いプレゼンテーションを行う。	・建築設計・インテリア設計の実務家である教員の指導のもと、現実の設計行為を念頭に置いた各種プロジェクトを通じて、設計行為に必要なデータを比較分類することができるようになる（知識・理解） ・それらを通じて、設計行為に必要なプレゼンテーションができるようになる（技能） ・それらを通じて、空間を設計できるようになる（思考・判断・表現） ・それらを通じて、設計行為に必要なすべての物事に関心を持てるようになる（関心・意欲・態度）	・建築設計・インテリア設計の実務家である教員の指導のもと、現実の設計行為を念頭に置いた各種プロジェクトを通じて、設計行為に必要なデータを比較分類することができるようになる（知識・理解） ・それらを通じて、空間を設計できるようになる（思考・判断・表現）
建築設計Ⅱ	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	4	担当教員が設けるスタジオに学生が参加し実務にそった設計の流れにより設計を行いプレゼンテーションを行う。	・建築設計・インテリア設計の実務家である教員の指導のもと、現実の設計行為を念頭に置いた各種プロジェクトを通じて、設計行為に必要なデータを比較分類することができるようになる（知識・理解） ・それらを通じて、設計行為に必要なプレゼンテーションができるようになる（技能） ・それらを通じて、空間を設計できるようになる（思考・判断・表現） ・それらを通じて、設計行為に必要なすべての物事に関心を持てるようになる（関心・意欲・態度）	・建築設計・インテリア設計の実務家である教員の指導のもと、現実の設計行為を念頭に置いた各種プロジェクトを通じて、設計行為に必要なデータを比較分類することができるようになる（知識・理解） ・それらを通じて、空間を設計できるようになる（思考・判断・表現）
インターンシップA	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	4	学外の一級建築士事務所において、一級建築士の指導により、実社会における設計・監理の実務を実施する。事前に学内オリエンテーション、事後に学内成果発表会を実施する。インターンシップの期間は1年次夏期休業中、1年次後期の任意の期間、1年次から2年次の間の春期休業中、2年次夏期休業中の4タームとする。（実習先の事務所の種別、指導者の資格等）建築設計の実務実績のあるチーフクラスの一級建築士で、本大学院がインターンシップの指導者として認めた設計者であり、一級建築士事務所とする。また、その実習を効果的なものとするために、事前指導、事後指導を実施する。	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、企画書・計画書・設計図書・工事監理書の作成等ができるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会で業務を遂行することができる（思考・判断・表現）	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、関係書類などを作成できるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会の業務になじむことができる（思考・判断・表現）
インターンシップB	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	3	学外の一級建築士事務所において、一級建築士の指導により、実社会における設計・監理の実務を実施する。事前に学内オリエンテーション、事後に学内成果発表会を実施する。インターンシップの期間は1年次夏期休業中、1年次後期の任意の期間、1年次から2年次の間の春期休業中、2年次夏期休業中の4タームとする。（実習先の事務所の種別、指導者の資格等）建築設計の実務実績のあるチーフクラスの一級建築士で、本大学院がインターンシップの指導者として認めた設計者であり、一級建築士事務所とする。また、その実習を効果的なものとするために、事前指導、事後指導を実施する。	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、企画書・計画書・設計図書・工事監理書の作成等ができるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会で業務を遂行することができる（思考・判断・表現）	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、関係書類などを作成できるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会の業務になじむことができる（思考・判断・表現）
インターンシップC	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	3	学外の一級建築士事務所において、一級建築士の指導により、実社会における設計・監理の実務を実施する。事前に学内オリエンテーション、事後に学内成果発表会を実施する。インターンシップの期間は1年次夏期休業中、1年次後期の任意の期間、1年次から2年次の間の春期休業中、2年次夏期休業中の4タームとする。（実習先の事務所の種別、指導者の資格等）建築設計の実務実績のあるチーフクラスの一級建築士で、本大学院がインターンシップの指導者として認めた設計者であり、一級建築士事務所とする。また、その実習を効果的なものとするために、事前指導、事後指導を実施する。	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、企画書・計画書・設計図書・工事監理書の作成等ができるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会で業務を遂行することができる（思考・判断・表現）	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、関係書類などを作成できるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会の業務になじむことができる（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
インターンシップD	家政学研究科 建築・デザイン 専攻	1	4	学外の一級建築士事務所において、一級建築士の指導により、実社会における設計・監理の実務を実施する。事前に学内オリエンテーション、事後に学内成果発表会を実施する。インターンシップの期間は1年次夏期休業中、1年次後期の任意の期間、1年次から2年次の間の春期休業中、2年次夏期休業中の4タームとする。（実習先の事務所の種別、指導者の資格等）建築設計の実務実績のあるチーフクラスの一級建築士で、本大学院がインターンシップの指導者として認めた設計者であり、一級建築士事務所とする。また、その実習を効果的なものとするために、事前指導、事後指導を実施する。	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べることができる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、企画書・計画書・設計図書・工事監理書の作成等ができるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会で業務を遂行することができる（思考・判断・表現）	・大学院修了後、実社会の中で即活躍できるようにするために、建築設計の実務能力として必要な業務知識を具体的に述べることができる（知識・理解） ・一級建築士の指導のもとで指導を受け、関係書類などを作成できるようになる（技能） ・建築設計の補助業務を行うことを通して、建築設計・工事監理の実務（建築工事の指導監督、建築確認に関するものを含む。）を体験することで実社会の業務になじむことができる（思考・判断・表現）
現代社会と児童特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	現在の子ども家庭福祉の問題について、仮説検証的なアプローチや探索的なアプローチを通して考える力を身につけることを目的とする。主に、社会的養護について焦点をあてつつ、子ども家庭福祉領域について探究し、福祉的な視点での支援や研究方法について学ぶ。	1.子ども家庭福祉分野の研究を進める際に必要な知識を習得し、研究計画を考えられる（知識・理解）。 2.今日の子ども家庭福祉分野の動向と傾向について理解し、その背景にある理論について説明できる（知識・理解・態度）。 3.子ども家庭福祉分野の課題について調査し、その対応策を実証する研究計画を立てることができる（知識・意欲・態度）。	1.子ども家庭福祉分野の研究を進める際に必要な知識を習得する（知識・理解）。 2.今日の子ども家庭福祉分野の動向と傾向について理解する（知識・理解・態度）。 3.子ども家庭福祉分野の課題について調査する研究計画を立てることができる（知識・意欲・態度）。
現代社会と児童演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	子ども家庭福祉に関する、研究方法の実際について学ぶ。主に児童虐待や子どもの貧困など、深刻化している子ども家庭福祉問題について、様々な観点から究明する方法を学び、これからの子ども家庭福祉のあり方を考える。具体的には、社会的養護における課題の中から、受講生生の関心に基づきテーマを選択し、論文等からレジュメを作り、発表等を行う。発表についてディスカッションを行ないながら、子ども家庭福祉研究の方法論を習得し、子ども家庭福祉の課題について究明することができるようになることを目指します。	1.児童虐待、子どもの貧困問題について理解し、その対応策と課題について説明することができる（知識・理解） 2.子ども家庭福祉に関する論文を読み、研究の手法、課題、その論文とは異なるアプローチ方法について、説明することができる（知識・理解）。 3.様々な子ども家庭福祉の問題について、福祉における様々な視点から議論することができる（知識・関心・態度）。	1.児童虐待、子どもの貧困問題について理解し、課題について説明することができる（知識・理解） 2.子ども家庭福祉に関する論文を読み、研究の手法、課題について、説明することができる（知識・理解）。 3.様々な子ども家庭福祉の問題について、議論することができる（知識・関心・態度）。
人間関係学特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	生涯発達における社会・情動発達の原理を理解し、人間関係におけるそれらの働きと課題を考察する。人間関係の発達において、社会・情動の発達が果たす役割を理解するとともに、具体的な生活の場における人間関係（家族の人間関係、保育所・幼稚園・学校における人間関係、地域・社会における人間関係）の展開やそこで生じる課題や危機を捉え、臨床発達の立場からの支援・対応について考える。	1.初期の母子相互作用について理解し、説明できる 2.情動の役割と発達について理解し、説明できる 3.気質とパーソナリティの発達について理解し、説明できる 4.社会性の発達について理解し、説明できる 5.アタッチメントの発達について理解し、説明できる 6.自己の発達について理解し、説明できる 7.各発達側面における研究的課題や問題について理解し、自らの研究課題として探求することができる	1.初期の母子相互作用について理解し、説明できる 2.情動の役割と発達について理解し、説明できる 3.気質とパーソナリティの発達について理解し、説明できる 4.社会性の発達について理解し、説明できる 5.アタッチメントの発達について理解し、説明できる 6.自己の発達について理解し、説明できる
人間関係学演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	「人間関係学特論」での理論的基礎をベースとして、人間関係、社会・情動発達における理解と支援について、文献講読・議論をもとに考察する。子どもが生活する様々な場面（家庭、幼稚園・保育所・学校、地域等）における、発達の危機や課題を理解し、その支援・対応について具体的実践の分析から考える。	1.人間関係、社会・情動の発達のアセスメントの基本的姿勢や考え方を理解し、説明できる。 2.社会・情動のアセスメント、発達支援・介入の具体的な方法について理解し、説明できる 3.様々な文献の精読を通して、支援事例への理解を深めるとともに、理論と実践を結びつけ、議論することができる。	1.人間関係、社会・情動の発達のアセスメントの基本的姿勢や考え方を理解し、説明できる。 2.社会・情動のアセスメント、発達支援・介入の具体的な方法について理解し、説明できる 3.様々な文献の精読を通して、支援事例への理解を深めることができる
幼児教育・保育学特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	幼児教育・保育の実践現場における現代的課題を踏まえたうえで、子どもの育ちや保護者の支援、保育者の専門性の向上を考えていく必要がある。こうした視点から、文献講読、事例検討を行い、保育の質を向上させ、自らが保育者としても資質向上を図ることができるような実践力を学ぶ。	1. 幼児教育・保育における現代的課題についてさまざまな論文・文献講読から深く思索し、問題の本質を整理し、具体的なアプローチを創造していく。（思考・判断・表現） 2. 児童虐待、子どもの貧困問題、保護者の養育態度などへの理解を深め、それらをふまえた子育て支援の方策を多様な視点から考えたり説明したりすることができる。（知識・技能） 3. 配慮が必要な子どもについての実情や課題を整理し、コンサルテーションに必要な知識や技能を十分に習得する。（知識・技能） 4. 小学校との接続の観点からスタートカリキュラムを理解し、幼児期からの資質能力の育ちを見通した保育内容を理解し、適切に説明することができる。（知識・技能） 5. 保育者の専門性を高め、資質向上につながるための記録論、保育援助論について深く理解し、それらを活用して積極的に議論することができる。（知識・技能）（態度）	1. 幼児教育・保育における現代的課題についてさまざまな論文・文献講読から思索し、問題を整理し、具体的なアプローチを考える。（思考・判断・表現） 2. 児童虐待、子どもの貧困問題、保護者の養育態度などへの理解を深め、それらをふまえた子育て支援の方策を考えたり説明したりすることができる。（知識・技能） 3. 配慮が必要な子どもについての実情や課題を整理し、コンサルテーションに必要な知識や技能を身につける。（知識・技能） 4. 小学校との接続の観点からスタートカリキュラムを理解し、幼児期からの資質能力の育ちを見通した保育内容を理解し、説明することができる。（知識・技能） 5. 保育者の専門性を高め、資質向上につながるための記録論、保育援助論について理解し、それらを活用して議論することができる。（知識・技能）（態度）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
幼児教育・保育 学演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	幼児教育・保育における現代的課題をもって保育の 参与観察を行い、事例検討を通して、保育の質 を分析する方法や、保育者の幼児理解、遊び理解、 援助方法についての見識を深めていく。	1. 保育実践の参与観察から、子どもの育ちや遊び の状況をとらえ、保育の課題を整理するなど、保育 実践をあらゆる視点から分析・考察し、適切な記録 にまとめることができる（思考・判断・表現） 2. 観察記録をもとに保育実践者との保育検討を十 分に行い、配慮が必要な子どもの援助法やより良い 子どもの育ちにつながる実践方法について提案する ことができる。（思考・判断・表現） 3. 遊びを通した総合的な指導の方法を理解し、幼 児期にふさわしい教育を実現する保育者としての幼 児理解、遊び理解、援助方法について、深い見識を もつ。（知識・技能）	1. 保育実践の参与観察から、子どもの育ちや遊び の状況をとらえ、保育実践を分析・考察し、記録に まとめることができる（思考・判断・表現） 2. 観察記録をもとに保育実践者との保育検討を行 い、配慮が必要な子どもの援助法やより良い子ども の育ちにつながる実践方法について考えることがで きる。（思考・判断・表現） 3. 遊びを通した総合的な指導の方法を理解し、幼 児期にふさわしい教育を実現する保育者としての幼 児理解、遊び理解、援助方法について、理解する。 （知識・技能）
教育課程・教授 法特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	本講義では、幼児教育と小学校教育の連携を踏まえ た幼小教育課程の編成・実施、幼児教育との接続を 明確にした小学校低学年における授業構想を論ず る。特に、小学校低学年における各教科等の指導内 容や指導方法、教材研究の在り方等に視点を当て、 幼児教育で身に付けたことを教科等の学習でどのよ うに生かしていくのかを考察する。この講義によ り、子どもの協働的な学びの在り方について問題意 識を高め、教育課程の編成、実施、評価、改善の方 法について理解する。また、指導方法の改善に関す る専門的理論を習得する。	1. 幼小連携の視点を踏まえた小学校教育課程の編 成・実施、評価、改善の方法を理解できる。（知 識・理解） 2. 幼児教育との接続を踏まえた授業を詳細にかつ 具体的に構想することができる。（知識・理解） 3. 小学校低学年において、幼児教育で身に付けた ことを取り入れて、各教科等の指導の在り方を各教 科等の特性に合わせて考察できる。（思考・判断・ 表現） 4. 子どもの協働的な学びの在り方について問題意 識をもつとともに、教育課程の編成や指導方法を改 善する必要性に気づき、意欲的に専門的理論を学ん でいる。（関心・意欲・態度）	1. 小学校教育課程の編成・実施、評価、改善の方 法を理解できる。（知識・理解） 2. 幼児教育との接続を踏まえた授業を構想するこ とができる。（知識・理解） 3. 小学校低学年において、幼児教育で身に付けた ことを取り入れて、各教科等の指導の在り方を考察 できる。（思考・判断・表現） 4. 教育課程の編成や指導方法を改善する必要性に 気づき、意欲的に専門的理論を学んでいる。（関 心・意欲・態度）
教育課程・教授 法演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	本演習は、小学校低学年における幼小連携を踏まえ た教育課程の編成と、各教科等の授業構想を対象と する。学生の関心や必要に応じて、教育課程や授業 構想に関する具体的なテーマを設定し、教育現場に おける各種意識調査や実践事例の調査・検討、文献 研究等を行い、研究報告としてまとめる。また、研究 報告を発表し、ディスカッションを通して教育課 程や授業構想についての知識や技能を習得すると ともに、教職の専門性への理解を深める。	1. 研究報告の作成や発表、ディスカッションを通 して、互いの課題意識や研究成果を知り、教職の専 門性について理解できる。（知識・理解） 2. 教育課程や授業構想について、課題を明確にし たテーマを設定し、適切な各種意識調査や実践事例 の調査・検討や文献研究を通して、多角的に考察で きる。（思考・判断・表現） 3. 研究成果を意欲的に研究報告をまとめたり、 ディスカッションに取り組んだりしている。（関 心・意欲・態度）	1. 研究報告の作成や発表を通して、互いの研究成 果を知り、教職の専門性について理解できる。（知 識・理解） 2. 教育課程や授業構想について、テーマを設定 し、各種意識調査や実践事例の調査・検討や文献研 究を通して、多角的に考察できる。（思考・判断・ 表現） 3. 研究成果を研究報告をまとめたり、ディスカ ッションに取り組んだりしている。（関心・意欲・態 度）
発達臨床学特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	発達心理学の理論を踏まえ、主に乳幼児期、児童期 に起こる様々な発達臨床的な問題について、障がい がある場合の特徴も含め理解を深めるために講義お よび文献研究を行う。特に、乳幼児期、児童期の発 達上の問題として取り上げられることが多い、言語 発達、知的発達とそれらの障がいについて取り上 げ、さらに、発達障がい等をめぐる問題について理 解を深める。	1.発達臨床の基礎としての発達心理学の理論につ いて、具体的な乳幼児・児童の姿と照らし合わせなが ら説明することができる。 2.乳幼児期、児童期の発達過程で起こる様々な発達 上の問題、特に、言語発達、知的発達とその障がい 、発達障がいについて、彼らを取り巻く人的、物 的、社会的環境を含めて説明できる。	1.発達臨床の基礎としての発達心理学の理論につ いて説明することができる。 2.乳幼児期、児童期の発達過程で起こる様々な発達 上の問題に関心を持ち、特に、言語発達、知的発達 とその障がい、発達障がいについて説明できる。
発達臨床学演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	発達のアセスメントの基本的考え方や多様な支 援方法について講義する。また、発達心理学の理論 や発達臨床上の問題に関する理解を基礎として、発 達支援事業所、特別支援教室、保育所等における フィールドワークを行い、実際の乳幼児・児童の発 達上のニーズと対応させながらアセスメントや支援 方法について実践的に学ぶ。	1.知的発達、言語発達、発達障がい等について基本 的なアセスメント方法について実践する経験を通し て基本的なスキルを身に付ける。 2.多様な支援方法について障害特性との関連で説明 することができる。 3.フィールドワークを通して、乳幼児・児童の個々 の発達上の支援ニーズおよび養育者の支援ニーズに ついて臨床発達心理学視点から考察することができ る。	1.知的発達、言語発達、発達障がい等について基本 的なアセスメント方法と支援方法について説明する ことができる。 2.フィールドワークを通して、乳幼児・児童の個々 の発達上の支援ニーズについて臨床発達心理学視点 から考察することができる。
子ども家庭生活 特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	人間にとって家庭は自らを世界に位置づける本拠 であるが、とりわけ子どもにとってはその心身、習 慣、文化の形成に影響を与える生活空間でもある。 本科目では家庭という世界の本質と独自性を踏まえ た上で、現代の子どもと子どもを取り巻く家庭生活 の諸相について、人と人、人とモノ、その人自身の アイデンティティとの連関から問題点を抽出し考え を深める。これらを通して児童学の家政学研究とし ての視座を拡げることのできる能力を身につける。	1.幼・小専修免許取得にふさわしい専門的な学識を 深めるとともに、家政学的視座を獲得することがで きるようになる。（知識・理解） 2.子どもの生活環境としての家庭の意義及び生活 の諸相について、人間存在の独自性を視座に問うこ とができるようになる。（思考・判断・表現） 3.現代の家庭生活とそれをめぐる諸問題について、 本質的なアプローチと解決の手立てを思索すること のできる態度を身につけることができるようになる。 （関心・意欲・態度）	1.幼稚園教諭専修免許取得にふさわしい専門的な学 識を深めるとともに、家政学の基礎的な視座を獲得 することができる。（知識・理解） 2.子どもの生活環境としての家庭の意義及び生活 の諸相について、人間存在の独自性を視座に問うこ とができる。（思考・判断・表現） 3.現代の家庭生活とそれをめぐる諸問題について、 本質的なアプローチと解決の手立てを思索すること のできる態度を身につけることができる。（関心・ 意欲・態度）
子ども家庭生活 演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	子どもと子どもを取り巻く家庭及びそれと緊密な環 境において生じている諸現象を、自らの問題意識と して引き受け、転化、追究した上で、発表・討論な どを通してその思考を深化、構築させることを目的 とする。その追究のための自らの視座と方法を深慮 する一連の作業を通して、今日的諸問題の解決の可 能性を探る。	1.幼・小専修教諭免許取得にふさわしい専門的な学 識を深めることができるようになる。（知識・理 解） 2.子どもと子どもを取り巻く家庭と、それに付随す る緊密な環境における諸問題について、自らの視座 に基づき、根本的な思索およびその解決のための手 立てを深慮できる実践的態度を身につけることが できる。（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度）	1.幼・小専修教諭免許取得にふさわしい専門的な学 識と家政学の基礎的な視座を深めることができる。 （知識・理解） 2.子どもと子どもを取り巻く家庭と、それに付随す る緊密な環境における諸問題について、家政学的見 解を含む自らの視座に基づき、根本的な思索および その解決のための手立てを深慮できる実践的態度を 身につけることができる。（思考・判断・表現） （関心・意欲・態度）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
保育・教育支援特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	教育・保育の場が抱えている諸課題の理解を深めるとともに、教育・保育支援の歴史の変遷及び信念・思想について教育学・保育学の文献、資料を通して探究する。特に、教育・保育の制度及び教育・保育計画の立案、環境の構成、保育・教育方法に関して実践の展開を解説する。さらに、子育てに課題を抱える保護者への支援も視野に入れ、地域における子育て支援のニーズや意義を研究する。	1.教育・保育の思想と歴史の変遷について探究し、専門的知識を総合的に習得できるようになる（知識・理解）。 2.教育・保育の制度やさまざまな支援の実践的取り組みを研究し、実践力を総合的に修得することができるようになる（思考力・判断力・表現）。 3.教育・保育の場が抱える諸課題を理解し、児童の保護者や地域の現代的ニーズに応じた実践力を総合的に修得することができるようになる（思考力・判断力・表現）。	1.教育・保育の思想と歴史の変遷について探究し、専門的知識の基礎を習得できるようになる（知識・理解）。 2.教育・保育の制度やさまざまな支援の実践的取り組みを研究し、実践力の基礎を修得することができるようになる（思考力・判断力・表現）。 3.教育・保育の場が抱える諸課題を理解し、児童の保護者や地域の現代的ニーズに応じた実践力の基礎を修得することができるようになる（思考力・判断力・表現）。
保育・教育支援演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	臨床発達心理の専門性を学ぶため、発達支援、子育て支援等の基礎的専門性、法制度、倫理等を教育・保育学、発達心理学の文献、資料を通して探求することを中心に行う。	1.臨床発達心理の専門性を学び、発達支援、子育て支援等の基礎的専門性、法制度、倫理等を総合的に理解できるようになる（知識・理解）。 2.保育・教育支援特論の学びを踏まえ、教育・保育に関する歴史や制度、家庭が抱えている諸課題の理解を深めるとともに、発達支援や保護者への支援に求められる専門性について総合的に理解できるようになる（思考力・判断力・表現）。 3.保育・教育支援特論の学びを踏まえ、教育・保育における発達支援や家庭への支援の実践的取り組みを研究し、実践力を総合的に修得できるようになる（思考力・判断力・表現）。	1.臨床発達心理の専門性を学び、発達支援、子育て支援等の基礎的専門性、法制度、倫理等の基礎を理解できるようになる（知識・理解）。 2.保育・教育支援特論の学びを踏まえ、教育・保育に関する歴史や制度、家庭が抱えている諸課題の理解を深めるとともに、発達支援や保護者への支援に求められる専門性の基礎を理解できるようになる（思考力・判断力・表現）。 3.保育・教育支援特論の学びを踏まえ、教育・保育における発達支援や家庭への支援の実践的取り組みを研究し、実践力の基礎を修得できるようになる（思考力・判断力・表現）。
発達心理学特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	発達心理学の歴史の変遷および主要な発達理論の特徴と実践における役割について理解する。それを踏まえ、生涯発達の視点から、主として乳幼児期・学童期における運動、認知・言語、情緒・社会性などの諸側面とそれらの相互関連性および障害がある場合の特徴も含め、近年の国内外における知見に精通するとともに、発達研究における方法論について探求する。	1.発達心理学の歴史の変遷について説明することができる（知識・理解）。 2.主要な発達理論における特徴と実践の役割について具体的に挙げる（知識・理解）。 3.主として乳幼児期・学童期における発達の諸側面について相互に関連づけてとらえるとともに、障害がある場合の特徴について述べる（知識・理解）（思考・判断・表現）。 4.近年の発達心理学の課題を見出すことができる（思考・判断・表現）。	1.発達心理学の歴史の変遷について説明することができる（知識・理解）。 2.主要な発達理論について具体的に挙げる（知識・理解）。 3.主として乳幼児期・学童期における発達の諸側面についてとらえるとともに、障害がある場合の特徴について述べる（知識・理解）（思考・判断・表現）。
発達心理学演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	人は他者の心をどのように理解するようになるのか。人間の発達過程における他者理解に焦点をあて、その理論的背景および最近の発達のアプローチを概観するとともに、家庭や保育・教育の現場において他者理解の発達と障害をどのようにアセスメントし、子育ておよび保育・教育における発達支援に生かしていくのかについて実践的に探究する。	1.人間の発達過程における他者理解の理論的背景について説明することができる。（知識・理解） 2.他者理解について最近の発達のアプローチの特徴を挙げる（知識・理解） 3.家庭や保育・教育の現場における他者理解の発達と障害のアセスメントから支援のプロセスを説明することができる。（知識・理解） 4.アセスメントの結果から、他者理解の発達を効果的に支援する方法の提案ができる。（思考・判断・表現）	1.人間の発達過程における他者理解の理論的背景について説明することができる。（知識・理解） 2.他者理解について最近の発達のアプローチの特徴を挙げる（知識・理解） 3.家庭や保育・教育の現場における他者理解の発達と障害のアセスメントの方法を説明することができる。（知識・理解）
発達障害支援特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	LD、ADHD、自閉症、アスペルガー症候群などの発達障害は、特別支援教育の展開や発達障害者支援法の施行とともに、注目されるようになってきた。保育や教育、福祉などの領域では、発達障害の子どもの理解し、支援していくための専門的知見と臨床スキルが望まれている。本講義では、知能、行動、社会性などの子どもの適応状況に大きく影響する障害特性のアセスメント技法、また、保育や教育、福祉における効果的な支援技法を文献精査を通して検討することを目的とする。	1.発達障害の支援方法、特別支援教育の近年の動向について十分に理解することができる。（知識・理解） 2.発達障害とそれに関連する障害についての国内外の研究動向を十分に理解することができる。（知識・理解） 3.発達障害の子どもの心理、行動等の状態を理解するための最新のアセスメント技法を十分に習得できる。（技能）	1.発達障害の支援方法、特別支援教育の近年の動向についてある程度理解することができる。（知識・理解） 2.発達障害とそれに関連する障害についての国内外の研究動向をある程度理解することができる。（知識・理解） 3.発達障害の子どもの心理、行動等の状態を理解するための最新のアセスメント技法をある程度理解できる。（技能）
発達障害支援演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	発達障害に関する基本的な知識を確認した後、現代社会における発達障害の支援についての諸課題について演習形式の授業展開で理解を深めていく。授業方法としては、発達障害児への支援方法について臨床発達心理学や障害児教育等の文献および資料を講読し、レジュメをもとに発表や討議を行う。	1.発達障害児の支援に関する研究領域の文献を批判的思考に基づいた探求姿勢で読み、主体的にレビューすることができる。（思考・判断・表現） 2.主体的に発表のレジュメを作成し、効果的にプレゼンテーションをすることができる。（技術） 3.発達障害児の支援に関する基礎知識をもとに、自分独自の考えをまとめて、積極的にグループディスカッションすることができる。（関心・意欲・態度）	1.発達障害児の支援に関する研究領域の文献を読み、ある程度レビューすることができる。（思考・判断・表現） 2.発表のレジュメを作成し、プレゼンテーションをすることができる。（技術） 3.発達障害児の支援に関する基礎知識をもとに考えをまとめて、グループディスカッションに参加することができる。（関心・意欲・態度）
表現文化研究特論Ⅰ	家政学研究科 児童学専攻	1	2	音楽との生涯にわたる関わりを見据え、その基盤となる乳幼児期の音楽にかかわる発達について、文献購読や映像資料等を通して学ぶ。その上で、児童期以降、人の生涯にわたる音楽とのかかわりを考える。さらに、乳幼児・児童を対象とした音楽研究の研究領域、方法論、研究の動向、実践事例などについて学び、理解を深める。	1.乳幼児期の音楽にかかわる発達について科学的根拠を踏まえた上で理解できるようになる（知識・理解） 2.音楽教育研究の対象・方法について理解し、実践的な課題に対して研究計画を立てることができるようになる（思考・判断・表現）	1.乳幼児期の音楽にかかわる発達について理解できるようになる（知識・理解） 2.音楽教育研究の対象・方法について理解できるようになる（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
表現文化研究特論Ⅰ	家政学研究科 児童学専攻	1	2	美術の作品鑑賞を初動にして、表現文化の広範な有り様の中から造形美術としての児童文化財に着目し、その造形技法や材料・用具を分析したうえで、制作者として作品を改良開発しながらオリジナルティーを追究し、子どもに向けた造形活動を探索していく。個の表現として作品の成立を主軸としながら、討議と考証を重ねるとともに作品の展示発表に繋げられるよう思考する。	1.児童文化財について検証・考察していくなから、造形表現としての作品を成立することができる。（知識・理解）（技能） 2.材料・用具の精通から子どもの表現としての造形活動プログラムを企画し、実践することができる。（技能） 3.子どもを取り巻く遊びを含めた造形活動の現状を読み取りながら素材等を選別し、適正な活動を提供することができる。（関心・思考・判断）	1.児童文化財について検証・考察していくなから、造形表現としての作品を目指すことができる。（知識・理解）（技能） 2.材料・用具の精通から子どもの表現としての造形活動プログラムを企画することができる。（技能） 3.子どもを取り巻く造形活動の現状を読み取りながら、素材等を選別し適正な活動を立案することができる。（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度）
表現文化研究演習Ⅰ	家政学研究科 児童学専攻	1	2	関連・隣接諸分野の研究動向を踏まえたうえで、音楽教育研究の文献購読、フィールド観察を行い、音楽教育研究の動向について学ぶ。さらに音楽教育研究の方法、対象、研究の動向について理解を深め、音楽との生涯にわたる関わり、社会生活における音楽の意義を見据えたうえで、音楽教育の現代的課題について思考できるようになる。	1. 乳幼児期を起点とした人間の生涯にわたる音・音楽とのかかわりを視野に入れて、現代社会における音楽教育の課題について思索することができるようになる（思考・判断・表現） 2. 音楽教育の現代的課題についてリサーチクエスチョンを立てることができ、それに関連するデータを収集し分析することができるようになる（技術） 3. 音楽教育の現代的課題について、発達の、社会的、歴史的視点を持って考察できるようになる（思考・判断・表現）	1. 現代社会における音楽教育の課題について思索することができるようになる（思考・判断・表現） 2. 音楽教育に関連するデータを収集し分析することができるようになる（技術） 3. 音楽教育の現代的課題について考察できるようになる（思考・判断・表現）
表現文化研究演習Ⅱ	家政学研究科 児童学専攻	1	2	造形における多様な表現技術の中から適正なものを選び、それを基盤に子どもに向けた造形活動を検討・企画し、実践する。企画者でありながらもファシリテーターとして活動への関わりを確認しながら、活動に付随する表現技術の改良・展開とともにその活動意図や子どもの関わりを考証し、子どもに適った造形活動を探る。そして文献や参考事例との比較検証と、実践活動を収めた記録メディアによる発表から討議検証を行う。	1.子どもに向けた造形活動の組み立てから実践に向けて適正な企画を立案して行けるようになる。（知識・理解・技能） 2.活動における子どもの個性から集団性への移行と協同性について適正に理解できるようになる。（知識・理解） 3.活動の展開や改良などをファシリテーターとして討議・検証することから子どもたちの要件を満たす活動を設定できる。（思考・判断・表現）	1.子どもに向けた造形活動の組み立てから実践に向けて適正な企画を立案して行けるようになる。（知識・理解・技能） 2.活動における子どもの個性から集団性への移行と協同性について適正に理解できるようになる。（知識・理解） 3.活動の展開や改良などをファシリテーターとして討議・検証することから子どもたちの要件を満たす活動を設定できる。（思考・判断・表現）
教育学演習	家政学研究科 児童学専攻	1	2	歴史的・原理的な基礎的理解をもとにして、現代社会における教育・保育のあり方や子どものおかれた現状、地域社会と学校の関係等を踏まえながら、教育・保育の未来を構想する力を養うことを目標とする。	1.現代社会における教育の課題を深く理解できるようになる。（知識・理解） 2.現代社会における教育の課題に実践的のどのように対応したらよいかを主体的に判断できるようになる。（思考・判断・表現）	1.現代社会における教育の課題を理解できるようになる。（知識・理解） 2.現代社会における教育の課題に実践的のどのように対応したらよいかを判断できるようになる。（思考・判断・表現）
教育学特論	家政学研究科 児童学専攻	1	2	教育の根本的な原理を、歴史的・文化的・社会的な視点からとらえ直し、教育行為を体系的に分析することを旨とする「教育学」の学問的基盤を理解したうえで、現代の教育・保育が抱えている諸問題とは何かを考察する力を養うことを目標とする。	1.教育学をとらえる先行研究について、その理論を中心に、知識と分析視点を十分に習得する。（知識・理解） 2.教育制度などに関する幅広い知識をもとに、現実の教育政策の動向やその結果を客観的に分析する思考力を十分に身につける。（思考・判断・表現） 3.教育政策の動向に関わる情報を積極的に収集し、理論とデータに照らして正確に分析する技能を習得する。（技術） 4.分析の結果を論述することを通じて、分析知見の発信のための準備が十分にできる。（思考・判断・表現）	1.教育学をとらえる先行研究について、その理論を中心に、基本的な知識と分析視点を習得する。（知識・理解） 2.教育制度などに関する基本的知識をもとに、現実の教育政策の動向やその結果を分析する思考力を身につける。（思考・判断・表現） 3.教育政策の動向に関わる情報を収集し、理論とデータに照らして分析する技能を習得する。（技術） 4.分析の結果を論述することを通じて、分析知見の発信のための準備ができる。（思考・判断・表現）
臨床事例研究	家政学研究科 児童学専攻	1	2	児童学領域の文献購読、討論を通して自らの研究課題を見出し、研究目的および研究方法を決める。そのデータ収集や分析の結果を随時演習形式で発表し、討論を行い考察を深める。	1.家政学に視座をおいた児童学研究的課題を設定し、主体的に研究を進めることができる。（思考・判断・表現） 2.批判的思考に基づいて論議しながら、その成果を修士論文としてまとめることができる。（技能）（関心・意欲・態度）	1.家政学に視座をおいた児童学研究的課題を設定し、研究を進めることができる。（思考・判断・表現） 2.研究の成果を修士論文としてまとめ発表することができる。（技能）（関心・意欲・態度）
児童学特別研究	家政学研究科 児童学専攻	1	10	児童学領域の文献購読、討論を通して研究課題を見出し、研究目的および研究方法を決める。データ収集や分析の結果を随時演習形式で発表し、討論や考察を行う。児童学に関する基本的な知識を確認した後、現代社会における子どもへの支援についての諸課題について演習形式の授業展開で理解を深めていく。授業方法としては、子どもに関する文献および資料を購読し、レジュメをもとに発表や討議を行う。	1.児童学に関する研究領域の文献を批判的思考に基づいた探求姿勢で読み、主体的にレビューすることができる。（思考・判断・表現） 2.主体的に発表のレジュメを作成し、プレゼンテーションをすることができる。（技能） 3.子どもへの支援に関する基礎知識をもとに、自分独自の考えをまとめて、積極的にグループディスカッションをすることができる。（関心・意欲・態度）	1.子どもへの支援に関する研究領域の文献を読み、ある程度レビューすることができる。（思考・判断・表現） 2.発表のレジュメを作成し、プレゼンテーションをすることができる。（技能） 3.子どもへの支援に関する基礎知識をもとに考えをまとめて、グループディスカッションに参加することができる。（関心・意欲・態度）
身体機能論Ⅱ (物質代謝研究)	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	がんや糖尿病性血管障害などの生活習慣病について、病態とその防御に関して栄養学的な観点から考察する。	1. がんや糖尿病性血管障害などの生活習慣病について総合的に理解し、その病態について学術的に説明することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 2. がんや糖尿病性血管障害などの最先端の話題について関心を持ち、自分の考えについて説明することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度） 3. がんや糖尿病性血管障害などの生活習慣病について、病態とその防御に関して深く議論することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）（関心・意欲・態度）	1. がんや糖尿病性血管障害などの生活習慣病について総合的に理解することができる。（知識・理解） 2. がんや糖尿病性血管障害などの最先端の話題について、自分の考えを持つことができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 3. がんや糖尿病性血管障害などの生活習慣病について、基礎的な議論に参加することができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
生活主体者論Ⅳ （発達科学研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	人間発達の心理的・行動的特徴やメカニズムを明らかにしてきた発達心理学は、近年、発達を多面的、総合的な変化として捉えようとする「発達科学」の確立へ向け進展している。本講義では、最近の行動遺伝学や神経科学などの知見も含め、発達科学に関する国内外の研究動向についてレビューし、障害の有無にかかわらず多様な発達の経路をどのように捉えるか、全体的な人間理解に立ち戻ることを可能にしつつ、個々のパターンを取り出すにはどのような枠組みが必要かなどについて議論する。	1.発達心理学から発達科学への変遷について説明できる。（知識・理解） 2.発達科学に関する国内外の最新の研究動向に関する情報を収集することができる。（技能） 3.各自の研究関心を具体的に説明し、「発達科学」の最新の研究動向に位置づけることができる。（知識・理解）（思考・判断・表現） 4.近年の発達科学における題を見出すことができる。（思考・判断・表現）	1.発達心理学から発達科学への変遷について説明できる。（知識・理解） 2.発達科学に関する最新の研究動向に関する情報を収集することができる。（技能） 3.各自の研究関心を「発達科学」との関連で説明することができる。（思考・判断・表現）
身体機能論Ⅳ （応用生理研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	人体の生理機能に関する分野の最先端の研究動向を食物栄養学の観点から探索し、その科学的方法論や将来における重要性を議論する。まず、解剖生理学、病理学に関する知識を、英語論文を主体に習得し、さらに先端的な研究についてレビューし、自らの研究に生かしていく。同時に、栄養学、医学の広い範囲にも関心を向けておく。	1.解剖生理学、病理学に関する英語論文を理解できる。一般英語の読解力のみならず、専門用語も80%以上理解できる。（知識・理解） 2.身体機能に関する先端的な研究について、批判的に評価し、自らの研究に生かすことができる。（思考・判断・表現） 3.栄養学や医学の広い範囲の英語の研究論文を自ら探索し、幅広い教養を身に付けることができる。（関心・意欲・態度）	1.解剖生理学、病理学に関する英語論文を理解できる。一般英語の読解力のみならず、専門用語も60%以上理解できる。（知識・理解） 2.身体機能に関する先端的な研究について、内容を素直に評価し、自らの研究に生かすことができる。（思考・判断・表現） 3.栄養学や医学の広い範囲の日本語の研究論文を自ら探索し、幅広い教養を身に付けることができる。（関心・意欲・態度）
生活主体者論Ⅰ （人間発達研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	乳児期から児童期を中心に、発達および発達臨床学における諸理論を講義する。また、当該領域の最新の研究動向を理解するため、関連文献の研究を行う。さらに、発達臨床の実践と研究を結びつけるため実際の事例を理論的に検討する。	1.乳児期から児童期の発達および発達臨床的課題に関心をもち、文献研究を通して問題の所在を説明し、自ら研究課題を見出すことができる。 2.乳児期から児童期の発達及び発達臨床学における諸理論を理解し、実際の事例について理論的に説明することができる。	1.乳児期から児童期の発達および発達臨床的課題に関心をもち、文献研究を通して研究課題について問題の所在を説明することができる。 2.乳児期から児童期の発達及び発達臨床学における諸理論を説明することができる。
生活主体者論Ⅱ （社会福祉研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	我が国における本格的な社会福祉研究は、1950年代以降のことである。これまでに提示された社会福祉の主要な理論を振り返ることをとおして社会福祉の基本的視点、理論的枠組について考える。社会福祉が、その思想、制度の史的展開という文脈の中で、どのように位置づけられてきたのかを分析する。一人の人間が社会の中で生きていくために充たされなければならぬ基本的な欲求（要求）が充たされない状況に対して、その時々社会はどのように応えてきたのか、児童福祉の分野を中心に考えてみる。	1.社会福祉の主要な理論の変遷を踏まえた上で、「学」としての今日の社会福祉を総合的に理解できるようになる。（知識・理解） 2.研究者・実践家としての高度な専門性を総合的に修得することができるようになる。（思考力・判断力・表現） 3.研究者・実践家としての倫理観と社会性を総合的に習得することができるようになる。（思考力・判断力・表現）	1.社会福祉の主要な理論の変遷を踏まえた上で、「学」としての今日の社会福祉の基礎を理解できるようになる。（知識・理解） 2.研究者・実践家としての高度な専門性の基礎を修得することができるようになる。（思考力・判断力・表現） 3.研究者・実践家としての倫理観と社会性の基礎を習得することができるようになる。（思考力・判断力・表現）
生活主体者論Ⅲ （人間形成研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	人間形成に関して、臨床発達心理学における知見や諸理論について講義する。また、乳児期から青年期までの人間形成についての最新の研究動向を理解するため、心理学の関連文献から先行研究をレビューする。	1.乳児期から青年期までの人間形成に関する諸理論を十分に理解することができる。（知識・理解） 2.当該領域の最新の研究動向を探索的にレビューすることができる。（思考・判断・表現） 3.先行研究のレビューをもとに、当該研究領域において各自が関心を持った研究テーマについて問題の所在を批判的思考力に基づいて説明することができる。（関心・意欲・態度）	1.乳児期から青年期までの人間形成に関する諸理論をある程度理解することができる。（知識・理解） 2.当該領域の最新の研究動向をある程度レビューすることができる。（思考・判断・表現） 3.当該研究領域において各自が関心を持った研究テーマについて問題の所在をある程度説明することができる。（関心・意欲・態度）
生活文化論Ⅰ（生活空間研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	持続可能な社会の達成には「生活の質の向上」が必要条件と考えられるが、その中で「住環境の改善」は建築計画や地域計画が深く関係する。この授業では、環境への負荷の削減や社会のあり方などを視野に入れた「住環境の改善」について研究を行い、それらの提案を示す。	「住環境の改善」に求められる必要条件には、環境条件や社会条件、経済条件、技術条件など相反する条件が関係するが、これらの条件について深く理解したうえで説明することができ、実際の建築計画や地域計画のなかで研究・評価できるようになる。（知識・理解）	「住環境の改善」に求められる必要条件である、環境条件や社会条件、経済条件、技術条件など相反する条件について理解した上で説明することができる。（知識・理解）
生活文化論Ⅱ （生活環境形成研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	少子高齢化に伴う建築や都市の変化の中で、快適な人間の生活環境を獲得することはこれからの時代、非常に重要なトピックとなる。そのためには過去に展開された様々な知見や諸理論を知るとともに、現代における地域の問題や課題を抽出し、それらを解決に近づけるための新しい方法論を構築していくことが必要である。本講義では、人間が自らの生活環境をよりよいものに近づけるためのどのような手法を用いたのか、国内外における過去の様々な事例について理解すると共に、実際の地域を調査し、その地域環境を改善するための手法を身につける。	・少子高齢化社会における建築や都市の変遷について基礎的な概念を具体的に述べるようになる。（知識・理解） ・建築やまちづくりにおける諸課題を解決していくための基盤となる能力を養うことができるようになり、論理的に考察、判断する能力を育成することができるようになる。（思考・判断・表現） ・最終的に、より質の高い快適な環境を計画、デザインすることができるようになる。（思考・判断・表現）	・少子高齢化社会における建築や都市の変遷について基礎的な概念を具体的に述べるようになる。（知識・理解） ・建築やまちづくりにおける諸課題を解決していくための基盤となる能力を養うことができるようになり、論理的に考察、判断する能力を育成することができるようになる。（思考・判断・表現）
生活文化論Ⅳ （人間空間デザイン研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	建築をとりまく空間は多種多様であるが、特に人間にとって快適な場を創造することは極めて重要である。人の場に対するイメージが、知覚、行動、過去の経験などが複合したプロセスを経て決定される以上、その本質を理解し、解決できる能力を養うことが大切である。生活文化論Ⅳでは、それらのことを踏まえ、必要な知識や技術を講じ、空間の在り方について様々な視点から考察する。	・人と環境との関係を総合的に捉えることによって、人間の心理や行動の特性に関する基礎的な概念を習得することができるようになる。（知識・理解） ・環境に関わる諸課題を解決していくための基盤となる能力を養うことができるようになり、論理的に考察、判断する能力を育成することができるようになる。（思考・判断・表現） ・最終的に、より質の高い快適な環境を計画、デザインすることができるようになる。（思考・判断・表現）	・人と環境との関係を総合的に捉えることによって、人間の心理や行動の特性に関する基礎的な概念を習得することができるようになる。（知識・理解） ・環境に関わる諸課題を解決していくための基盤となる能力を養うことができるようになり、論理的に考察、判断する能力を育成することができるようになる。（思考・判断・表現）

科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
生活文化論V （生活環境研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	生活をサポートする建築には、自然環境・都市環境・人工環境（機械設備等）・生活スタイル（機能・家族構成・ライフステージ・趣味嗜好）など様々な環境（要因）が関係している。これらは全て生活環境であり、生活環境が複雑に絡まりあい、「空間」・「形態」そしてその空間に必要な「もの」が創り出される。生活環境をバランスよく理解し解決した優れた建築が持続可能な居心地の良い場を創り出しいる。持続可能な居心地の良い建築を創り出すためには、建築を取り巻く生活環境を理解した上で、現代における生活環境の問題や課題を自分なりに抽出し、それらを解決する新しい方法論を導き出す必要がある。生活環境が生み出す「空間」・「形態」そしてその空間に必要な「もの」との関係性を事例から導き出し自分なりの方法論を提示し、実際の建築を創る手法を身につける。	・事例より生活環境が生み出す「空間」・「形態」そしてその空間に必要な「もの」との関係性を導き出し、持続可能な居心地の良い建築を創り出す自分なりの方法論を提示することができる。（知識・理解） ・導き出した方法論を実際の設計に応用し、持続可能な居心地の良い建築を創り出すことができる。（思考・判断・表現）	事例より生活環境が生み出す「空間」・「形態」そしてその空間に必要な「もの」との関係性を導き出し、持続可能な居心地の良い建築を創り出す自分なりの方法論を提示することができる。（知識・理解）
食生活素材論I （食品素材研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	食品成分表に記載されている食品成分の分析法について学ぶとともに、液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー等の機器分析の手法について包括的に学ぶ。	1.食品成分の分析法について、学部学生、修士学生に説明できる。（思考・判断・表現） 2.機器分析法について、学部学生、修士学生に説明できる。（思考・判断・表現）	1.食品成分の分析法について説明できる。（思考・判断・表現） 2.機器分析法について説明できる。（思考・判断・表現）
食生活素材論II （食品機能研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	食品には、第一次機能（栄養性）や第二次機能（嗜好性）のほかに、第三次機能として生体生理調節機能がある。本講では、ヒトの身体構造や生理機能に寄与する食品成分について、国内外の学術的知見を体系的に理解する。また、食品を様々な技術（乳酸菌発酵・分離・酵素反応など）で加工処理することによって、新たに生成する生理活性成分についても包括的に学ぶ。	1.食品の第三次機能について、各国の許認可制度を含めて総合的内容を説明できる。（知識・理解） 2.特定保健用食品として許可されているすべての関与成分について、総合的内容を説明できる。（知識・理解） 3.食品の様々な加工技術によって新たな機能成分が生成するしくみについて、総合的内容を説明できる。（知識・理解）	1.食品の第三次機能について、基礎的内容を説明できる。（知識・理解） 2.特定保健用食品として許可されている数種類の関与成分について、基礎的内容を説明できる。（知識・理解） 3.食品の発酵技術によって新たな機能成分が生成するしくみについて、基礎的内容を説明できる。（知識・理解）
食生活素材論III （食品微生物研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	バイオテクノロジーの進歩により、微生物を利用した新たな食品素材、加工食品、食品添加物が日々生み出されている。これらについての最新の知見を国内外の文献を通して理解する。また食品を保存するための方法、特に微生物汚染の防除方法について、文献を通して具体的に学ぶ。	1.微生物の発酵食品の製造方法について、最新の知見を織り交ぜて食品ごとに具体的に説明できる。（知識・理解） 2.微生物を用いた物質生産について、最新の知見を織り交ぜて物質ごとに具体的に説明することができる。（知識・理解） 3.微生物汚染の防除方法について、最新の知見を織り交ぜて微生物の生態を絡めて具体的に説明することができる。（知識・理解） 4.微生物による物質生産に関する専門書や論文を読んで理解し説明できる。（技能）	1.微生物の発酵食品の製造方法について、最新の知見を織り交ぜて説明できる。（知識・理解） 2.微生物を用いた物質生産について、最新の知見を織り交ぜて説明することができる。（知識・理解） 3.微生物汚染の防除方法について、最新の知見を織り交ぜて説明することができる。（知識・理解） 4.微生物による物質生産に関する専門書や論文を読んで理解できる。（技能）
食生活素材論IV （食品物理化学研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	食品について学ぶ場合、とすれば栄養成分などの化学的側面に目がいきがちだが、歯ごたえなどのテクスチャーは食物の二次機能（嗜好性）に大きく関与する。また、近年、社会の高齢化に伴って食物の咀嚼・嚥下機能が低下した高齢者が増加しており、そうした咀嚼・嚥下障害者用の介護食の合理的なテクスチャーデザインが求められている。本講義では、テクスチャー研究の最先端がまとめられた本を用いて、テクスチャー研究の方法論について学ぶ。この科目で得た知識は、食品のテクスチャーの実験や実務に活用できる。	1.食品テクスチャーの他の専門書や論文を読んで理解できる。（技能） 2.食品の物性の概念について理解し例を挙げて説明できる。（知識・理解） 3.嚥下困難者用介護食の基準や求められるテクスチャーに関して説明できる。（知識・理解）	1.食品テクスチャーの他の専門書や論文を調べながら概要を理解できる。（技能） 2.物性と物理量と差を理解できる。（知識・理解） 3.嚥下困難者用介護食の基準や求められるテクスチャーに関して資料を見ながら説明できる。（知識・理解）
衣生活素材論I （被服素材研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	繊維の構造と物性に関する最新の研究事例を取り上げ、その内容の理解を通じて、高分子物理学の基礎と最新の分析機器を用いた解析技術について学修する。	1.最新の文献を精読し、その内容を理解した上で、新規かつ有用な情報について説明することができる。（知識・理解） 2.繊維の微細構造に関して、すでに解明されていることを把握した上で、未解決問題について説明し、今後の展望について予測を述べるることができる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1.最新の文献を精読し、その内容を説明することができる。（知識・理解） 2.繊維の微細構造に関して、すでに解明されていることを説明することができる。（知識・理解）
食生活計画論I （調理設計研究）	家政学研究所 人間生活学専攻	1	2	人間生活に密着した学問分野である調理学は、調理工程中の諸現象を科学的に解明し、法則性を見出し、調理設計の実際役に役立つ理論を構築して食生活の充実・向上を図ることを目的とする。本科目では、主として調理における食品素材の変化を化学的、物理的ならびに組織学的に究明することにより調理機能を多面的に評価する研究の方法論について、主に研究論文（英文も含む）を通読することにより理解する。本科目は自ら調理学関連の研究を進めることができる高い研究能力、研究指導を行える力を身につけ、今後の研究生活に活かすことができる学修内容である。	1.の調理学関連の研究例を体系的かつ理論的に説明できる。（知識・理解） 2.調理学関連の研究テーマを自ら決定し、資料調査・考察し、英語で発表できる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1.英文の調理学関連の研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 2.与えられた調理学関連の研究テーマについて、資料調査・考察し、英語で発表できる。（知識・理解）（思考・判断・表現）



科目名称	科目区分	学年	単位	科目概要	到達目標（成績評価A）	単位修得目標（成績評価C）
食生活計画論Ⅱ （栄養教育研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	栄養教育とは、人々の健康の維持増進、および生活の質の向上を目的として、望ましい栄養状態と食行動の実現に向けて、人々の行動変容を支援する活動を行う。栄養教育を実施する上で必要とされる理論的基礎と研究を遂行していく上で必要な諸技術、知見を理解し、研究の基礎となる情報収集及び調査データの分析方法を、身につける。	1.理論的基礎と研究を遂行していく上で必要な諸技術、知見を理解して、説明できる。（知識・理解） 2.情報収集及び調査データの分析ができる。（技能） 3.論文を書くことができる。（思考・判断・表現）	1.理論的基礎と研究を遂行していく上で必要な諸技術、知見を理解できる。（知識・理解） 2.情報収集及び調査データの分析方法が理解ができる。（技能） 3.論文の書き方が理解できる。（思考・判断・表現）
衣生活計画論Ⅰ （服飾文化研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	文化史的なアプローチを基本とし、服飾が持つ「衣服（装身具を含む）」と「装飾」というファクターに関して、深く考える。「衣服」という面については、日本の衣服、特に「着物」及びその原形である「小袖」について、歴史的様式変化を実作品や絵画資料、小袖模様雛形本などを通して考察する。また、「装飾」という面については、模様の機能や種類、その歴史の変遷などを考える。	1.衣服に関する学術論文等の文献を精読し、その内容を理解した上で、新規かつ有用な情報について説明ができる。（知識・理解） 2.衣服の生理的・形態的・機能的変化を正しく理解し、衣服の変遷を説明できる。（知識・理解） 3.「小袖」「着物」の実物調査や分析の方法を理解し、目的に合わせて的確にこれらを活用することができる。（技能）	1.学術論文等の文献を精読し、その内容を説明ができる。（知識・理解） 2.人体の生理的・形態的・機能的変化を理解できる。（知識・理解） 3.衣服の調査方法や分析方法を理解することができる。（技能）
衣生活計画論Ⅱ （被服心理情報研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	日本における被服心理学は、本格的な研究が始まってまだ30年程度と、家政学の範疇においては、新しい分野に属し、次代を担う研究者の育成が重要な課題となっている。本授業では、被服心理学を本格的に学びたい学生のために、研究の基礎となる情報収集方法及び調査データの分析手法を中心に講義する。また、具体的理解を促進するため、最新の論文等を題材として、学生と内容の検討を図る。	被服心理学に関する基本的知識を身につけ、主体的に研究を進めることができるようになることを目的とする。具体的到達目標として、以下の2点を挙げる。 1.被服心理学の研究手法を理解し、先行研究の内容を十分理解し、その概要を説明できるようになる。（知識・理解） 2.被服心理学の研究手法を理解した上で、仮説検証のための調査設計、実行、結果の分析ができるようになる。（思考・判断・理解）（技術）	被服心理学に関する基本的知識を身につけ、主体的に研究を進めることができるようになることを目的とする。単位修得目標として、以下の2点を挙げる。 1.被服心理学の研究手法を理解し、先行研究の内容が理解できるようになる。（知識・理解） 2.被服心理学の研究手法を理解した上で、仮説検証のための基本的な調査設計、実行、結果の分析ができるようになる。（思考・判断・理解）（技術）
衣生活計画論Ⅲ （被服造形研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	学術論文等を通して、ヒトのライフステージ別に求められる衣服について造形学的視点から議論する。人体の生理的・形態的・機能的特徴や変化を定量的に捉えたうえで、研究遂行のための評価方法や分析方法について学修する。	1.学術論文等の文献を精読し、その内容を理解した上で、新規かつ有用な情報について説明ができる。（知識・理解） 2.人体の生理的・形態的・機能的変化を正しく理解し、説明できる。（知識・理解） 3.評価方法や分析方法を理解し、目的に合わせて的確に分析することができる。（技能）	1.学術論文等の文献を精読し、その内容を説明ができる。（知識・理解） 2.人体の生理的・形態的・機能的変化を理解できる。（知識・理解） 3.評価方法や分析方法を理解し、目的に合わせて分析することができる。（技能）
衣生活計画論Ⅳ （被服情報工学研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	ファッションプロダクト・サービスの企画、設計から、製造、流通、販売、消費に至る様々な過程で情報技術が利用され、技術革新により従来のファッション産業が大きく変貌している。この科目では、ファッションプロダクトのサプライチェーンやファッション関連サービスにおける技術課題を多面的に検討する。次に、コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョン、マシンラーニング等の先進事例を調査し、その動向を俯瞰的に整理する。調査分析に基づき、衣生活の将来展望について検討した上で、イノベティブなファッションプロダクト・サービスによる新たな価値の創出を目指す。	1.ファッションプロダクトのサプライチェーンやファッション関連サービスにおける技術課題を多面的に検討して理解し、客観的、かつ、正確に説明ができる。（知識・理解） 2.コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョン、マシンラーニング等の先進事例を調査する方法を修得し、実際に調査した結果を俯瞰的に整理して学術的な成果としてまとめることができる。（知識・理解） 3.当該分野の専門家と円滑なコミュニケーションができ、研究を進展させることができる。（関心・意欲・態度） 4.ファッションプロダクトのサプライチェーンやファッション関連サービスにおける課題の解決に向けて、情報技術を活用した具体的な解決方法を提案して新しい価値を創出できる。（思考・判断・表現）	1.ファッションプロダクトのサプライチェーンやファッション関連サービスにおける技術課題を多面的に検討して理解して説明ができる。（知識・理解） 2.コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョン、マシンラーニング等の先進事例を調査する方法を修得し、実際に調査した結果を俯瞰的に整理できる。（知識・理解） 3.当該分野の専門家と円滑なコミュニケーションができる。（関心・意欲・態度） 4.ファッションプロダクトのサプライチェーンやファッション関連サービスにおける課題の解決に向けて、情報技術を活用した具体的な解決方法を提案できる。（思考・判断・表現）
食生活計画論Ⅲ （給食経営管理研究）	家政学研究科 人間生活学専攻	1	2	給食経営において重要な管理対象となるのが献立であり、その品質の水準が経営に大きく関与する。そこで、給食経営管理領域における研究をおこなうにあたり、総合品質を設計品質と適合品質の点から捉え、その評価手法について構築し、給食のマネジメントについて考究する。	1.給食経営管理関連の研究例を体系的かつ理論的に説明できる。（知識・理解） 2.給食経営管理関連の研究テーマを自ら決定し、資料調査・考察し、英語で発表できる。（知識・理解）（思考・判断・表現）	1.英文の給食経営管理関連の研究例を簡単に説明できる。（知識・理解） 2.与えられた給食経営管理関連の研究テーマについて、資料調査・考察し、英語で発表できる。（知識・理解）（思考・判断・表現）